

2018年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2019年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2019年 9月

これまでに発行した『学生による授業評価アンケート報告書』は、大学教育開発・支援センターの Web サイトより閲覧いただけます。下記 URL または QR コードへアクセスし、「刊行物」から「学生による授業評価アンケート報告書」を選択してください。

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>



高い研究力が担保する充実した教育力の実現に向けて

総長 郭 洋春

本学における「学生による授業評価アンケート」は2018年度で15年目を迎えました。この間、多くの教職員の皆さんの努力により改善が重ねられ今日に至ることができました。ここに改めて感謝いたします。今では当たり前のように行っている授業評価アンケートもここまで定着するには、多くの教職員の理解と協力があったからだと感じたいと思います。こうしたたゆまぬ努力が、2019年度「THE世界大学ランキング」で世界1,258校中の601～800位グループ（国内103校中14位タイ、私学だけでは3位タイ）にランクインするという好評価を得ることにつながったのだと思います。私たちはこの結果に満足せず、これからも教育の向上を目指して行きたいと思っています。

言うまでもなく大学の教員は教育者であり、研究者であります。従って、大学の教育の質は研究の質が高まれば高まるほど質の高い教育が行われるといってもいいでしょう。本学の研究の質の高さを図る指標として『日経トレンディ』2019年9月号の「主要101大学 教育・研究力ランキング」で本学は、私立大学で4位（全体で24位）にランキングされました。特に、「海外との連携を示す国際共著論文率」では全体で5位、さらに論文のインパクトを示すFWCI（Field Weighted Citation Impact：相対被引用率）では全体で7位となっています。これらに対して『日経トレンディ』は「生徒からの人気が高いMARCHでは、昨今の評判通り、立教大学が一步抜け出ている。論文の質がFWCIで1.21、国際共著論文率が39.5%と優秀だったのが主な要因だ」と分析しています。こうした高い研究力があるからこそ質の高い教育が行われていると思います。

さらに本学の教育充実度が高い理由は、第一に効果的教育ができるようすべての教室にネット環境はもちろん、教育に必要な設備を配置していること。第二に専任教員はもちろん兼任教員の授業にもTA・SAが使用できるようにしていること。第三に成績評価調査制度を導入し、成績評価に対する厳格性・透明性を担保していることなどがあげられるでしょう。こうしたハード・ソフト両面における授業環境の整備は他大学に誇るものがあります。

本学の授業評価アンケートの特徴は、第一に3年に一度全教員を対象にアンケート調査を行うことで、幅広い科目に対するFD（Faculty Development）の向上を図っていること。第二にアンケート結果については大学教育開発・支援センターを中心に分析を行い、科目担当者・学部等に集計結果のフィードバックを行い、担当者からは必ず結果に対する回答を得ていること。第三にアンケートの分析結果・所見票・報告書を幅広く公開していることです。こうした特徴こそ、常に教育の質を向上させてきたといっていいいでしょう。

一方で、授業環境については改善すべき課題も残されています。それは履修者数に対する適正な教室規模や空調機能問題、そして最大の課題が授業中の学生による私語です。特に授業中の私語問題は日本の多くの大学が抱える問題です。これらの諸課題についても今後改善していかなければなりません。

本学はこれまでも、そしてこれからも高い教育力の実現に向けて努力していきます。そのためにも教職員、学生の皆さんのさらなるご協力をお願いします。

目次

はじめに

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
1-5 回答結果の全学的な活用に向けて	5
2. 授業評価アンケートの実施概要	6
2-1 実施方式	6
2-2 設問項目	6
2-3 各学部等の科目選定方針	10
2-4 実施科目数	11
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	12
2-7 「所見票」の公開	12
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	13
3-1 科目担当者	13
3-2 学部等	13
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	22
4-3 理学部	27
4-4 社会学部	29
4-5 法学部	32
4-6 経営学部	35
4-7 異文化コミュニケーション学部	39
4-8 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター	42
4-9 観光学部	44
4-10 コミュニティ福祉学部	48
4-11 現代心理学部	50
4-12 全学共通カリキュラム運営センター	52
4-13 学校・社会教育講座	61
5. 2018年度のまとめと今後の展望	65
6. 2018年度集計データ（資料編）	67
6-1 回答者数・回答率	67
6-2 学部等別平均値	68

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における「学生による授業評価アンケート」は、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.16参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメ

ントを通してその内容を明らかにすることを求める。

- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした*。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

*現在は Web のみで公開

(以上、2004 年度報告書より抜粋)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は 2004 年度にスタートし、2006 年度までの当初 3 年間は「講義科目を対象に 1 教員 1 科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことからも明らかである。

2007 年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008 年度、2009 年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、「学生による授業評価アンケート」開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006 年度には、「1 教員 1 科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた(2007 年 1 月 25 日、部長会)。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議

を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1教員1科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

基本方針決定以降の、科目選定方針は以下の通りである。2010年度は定められた基本方針に拠って、実施する初年度となり、上記②の「1教員1科目」の原則により実施した。

- ・2010、2013、2016年度：「1教員1科目」
- ・2011、2012、2014、2015、2017、2018年度：「学部等の必要性に応じた選定」

なお、2018年度の各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針（p.10）」を参照されたい。

1-5 回答結果の全学的な活用に向けて

本学は、従来、1-1に記載した目的に沿い、「学生による授業評価アンケート」の集計結果を教員個人の授業改善や、学部等によるFDの基礎資料として活用してきた。しかし、回答データを計量分析し、全学的なFDに活用するには至っていなかった。

そこで、2012年度10月に発足した大学教育開発・支援センター教学IR部会では、2015年度に2013年度の回答データを用いた分析を実施し、「教員の授業に対する工夫や努力、たとえば、各回の授業内容を明確に提示するよう意識するなどの取り組みによって、学生の授業や学習に対する意欲は高められる」という知見を得、教育改革推進会議を通じて全学へ報告し、共有した（詳細は、2015年度報告書に掲載）。

上述の知見を踏まえて、2017年度に行われた第1回「立教大学 教育活動特別賞」の選定にあたっては、2016年度授業評価アンケートの一部の項目の集計結果を各学部等へ提供した。各学部等からの候補者の推薦を受けて、最終的に34名の方々に賞を授与している。

2018年度は、受賞者の教育に関する優れた取り組みを共有するために、全学のFD活動としてシンポジウムを開催した。

学生がアンケートに回答するにあたり相当な負担を被っていることを肝に命じ、今後もこれまで以上にその結果の活用に努めたい。

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター、全学共通カリキュラム運営センター、学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部等を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp.7-8参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2018年度は、文学部（2設問）、経済学部（5設問）、理学部（4設問）、現代心理学部（3設問）、全学共通カリキュラム運営センター（6設問）が学部等による設問項目を設定した（p.9参照）。

全学共通カリキュラム運営センターの開設する科目等の表記について

全学共通カリキュラム運営センターの開設する科目は、2016年度入学者より「全学共通科目」として開講しています。

本報告書においては2016年度以降入学者用の名称を用いて記載しています。

<本報告書における表記>

- ① 科目の開設学部等を示す場合 : 「全学共通カリキュラム運営センター」
- ② 開設科目の総称を示す場合 : 「全学共通科目」
- ③ ①または②を略して示す場合 : 「全学共通」

2018年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 大枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード/Course No.	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U) (W)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 ① ② ③ ④
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	本学学部生以外
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別外国人学生 (Special International Students) ①②
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) ①②
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) ①②

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満		⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した		⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした		⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った		⑤ ④ ③ ② ①
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間		⑤ ④ ③ ② ①
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 聞きやすい話し方だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた		⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった		⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない ⑨	⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない ⑨	⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた		⑤ ④ ③ ② ①
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。		
1) 自分にとって新しい考え方・発想		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識		⑤ ④ ③ ② ①
3) 自分で調べ、考える姿勢		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味		⑤ ④ ③ ② ①
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) わかりやすい授業だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた		⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した		⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

文学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

経済学部

- 1) (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた
- 2) (基礎ゼミナール1) レジюмеやレポート作成の力がついた
- 3) (情報処理入門1) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
- 4) (情報処理入門1) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
- 5) (情報処理入門1) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた

理学部

- 1) シラバスに沿って授業が行われた
- 2) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 4) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

現代心理学部

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

全学共通カリキュラム運営センター

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた
- 5) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた
- 6) この授業の登録方法 (次の中から選んでマークしてください)
⑤ 1次抽選登録 ④ 2次抽選登録 ③ 科目コード登録 ② その他 ① 覚えていない

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通科目および学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通科目の言語系科目を除いた科目とした。

2018年度は、基本方針により「学部等の必要性に応じた選定」により実施した（詳細はp.5参照）。各学部等の選定方針は、下表の通り。

学部等	科目選定方針
文学部	(1) 各学科・専修の導入教育(初年次教育)科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2) 文学部基幹科目 (3) 各学科・専修で必要と認める科目
経済学部	(1) 「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない (2) 本年度については原則春学期に実施するが、通年科目は秋学期に実施する。ただし過年度通年科目であった経済学1・2は、春・秋学期で担当教員が異なるため春・秋学期に実施。また簿記1・2は同一教員のため秋学期のみに実施する (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目についてアンケートを実施する
理学部	(1) 数学科では新カリキュラム(2010年度より移行)の有効性を検証するために、新カリキュラムにおける新規に設計した必修科目・選択必修科目について、定点観測(毎年、同じ科目で調査)を行う (2) 物理学科では原則として複数担当科目以外の全ての講義科目を選定する。経年変化を見るために、なるべく毎年同じ科目について、アンケートを実施する。ただし、講究は受講者が少ない場合が多いので、担当者の希望がある場合のみ実施することにする (3) 化学科では原則として、必修講義科目ならびに選択講義科目(複数教員担当科目を除く)の経年変化を調査するために、毎年同じ科目についてアンケートを実施する (4) 生命理学科では授業評価に対する改善策の具体的効果を継続的に検証するために、2018年度も同じ科目についてアンケートを実施する (5) 共通教育科目では独自にアンケートを行うため実施しない
社会学部	(1) 必修科目はすべて実施する (2) 「講義科目」については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う
法学部	(1) 3年に1回全教員(専任・兼任)について、1教員1科目を原則に行う (2) (1)を行わない年度については、本学で初めて授業を開講する教員、およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行う ※2018年度は(2)に該当する
経営学部	「演習」を除く全科目で実施する。ただし、科目特性を考慮して、独自にアンケートを実施する科目については、当該アンケートの実施対象に含めない
異文化コミュニケーション学部	基礎科目の専門4領域から各々1科目以上実施する
グローバルリベラルアーツプログラム運営センター	演習系科目は実施対象外とする
観光学部	(1) 原則として学部方針によって選定する2年間のうちに全教員1回1科目で実施する (2) 演習科目は対象としない (3) 複数教員担当科目は対象としない (4) 集中講義は対象としない
コミュニティ福祉学部	(1) 学部専任教員(助教含む)1科目以下の実施を原則とする (2) 資格科目を優先する (3) 演習科目は対象外とする (4) 昨年度実施科目を優先する

学部等	科目選定方針
現代心理学部	(1) 学部専任教員が担当する「学部統合科目(旧カリ「学部共通選択科目」)」全科目 (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」 (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」 なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象としない
全学共通カリキュラム運営センター	(1) 本学で開講される学びの精神、多彩な学び1～5カテゴリの講義系の全科目、演習系「立教ゼミナール発展編」の全科目、および多彩な学び・6カテゴリで開講するグローバル教育センター提供科目を対象とする (2) 学びの精神、多彩な学び1～5カテゴリは、担当する1教員(専任・兼任)1科目の実施とする。ただし、「立教ゼミナール発展編」を担当する教員はこれに追加して実施する (3) 多彩な学び・6カテゴリで開講するグローバル教育センター提供科目は、本学で開講される全科目で実施をする (4) 1教員につき実施対象候補科目が複数ある場合には、以下の順序で、実施科目を選定する ①学びの精神を優先 ②多彩な学びの企画提案型科目「コラボレーション科目」を優先 ③新座開講科目を優先 ④2時限・3時限を優先 ⑤全体における春学期・秋学期の実施科目数に配慮する
学校・社会教育講座	(1) 履修者5名以下が予想される科目は対象外とする (2) 教職課程は「講義科目1教員1科目」を原則として実施する (3) 他課程は、今年度、特に授業評価を要する重点的科目に限って、アンケート実施する

2-4 実施科目数

実施科目数は春学期 575 科目、秋学期 499 科目、合計 1,074 科目であった。

実施予定科目数は、春学期 580 科目、秋学期 504 科目、合計 1,084 科目であったので、全学の実施率(実施科目数/実施予定科目数)は 99.08% (1,074/1,084)、所見票提出率は 78.49% (843/1,074) となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		春学期	秋学期		春学期	秋学期		春学期	秋学期
文学部	126	62	64	123	60	63	93	44	49
経済学部	67	53	14	67	53	14	61	48	13
理学部	94	46	48	94	46	48	80	39	41
社会学部	119	53	66	119	53	66	86	40	46
法学部	8	5	3	8	5	3	7	5	2
経営学部	106	60	46	104	59	45	68	43	25
異文化コミュニケーション学部	9	5	4	9	5	4	9	5	4
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	11	7	4	11	7	4	11	7	4
観光学部	48	26	22	47	25	22	34	15	19
コミュニティ福祉学部	34	15	19	34	15	19	24	13	11
現代心理学部	32	13	19	32	13	19	17	7	10
全学共通カリキュラム運営センター	380	197	183	376	196	180	307	165	142
学校・社会教育講座	50	38	12	50	38	12	46	34	12
合計	1,084	580	504	1,074	575	499	843	465	378

2-5 実施期間

アンケートの実施期間は1週目を原則とし、最終授業週は予備週とした。

春学期：2018年7月6日（金）～7月19日（木）

秋学期：2019年1月7日（月）、1月10日（木）～1月23日（水）

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、延べ履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	春学期		秋学期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	5,012	3,498	4,608	3,150	9,620	6,648
経 済 学 部	2,869	2,342	1,410	962	4,279	3,304
理 学 部	3,763	2,474	2,974	1,885	6,737	4,359
社 会 学 部	9,372	5,287	8,479	4,428	17,851	9,715
法 学 部	1,405	406	506	242	1,911	648
経 営 学 部	7,819	4,710	6,608	2,779	14,427	7,489
異文化コミュニケーション学部	316	272	293	184	609	456
グローバルイノベーションプログラム運営センター	145	118	74	63	219	181
観 光 学 部	3,487	2,451	2,449	1,628	5,936	4,079
コミュニティ福祉学部	1,359	986	1,922	1,442	3,281	2,428
現代心理学部	1,460	1,060	2,189	1,627	3,649	2,687
全学共通カリキュラム運営センター	22,199	15,383	18,932	11,968	41,131	27,351
学校・社会教育講座	1,752	1,412	379	309	2,131	1,721
合 計	60,958	40,399	50,823	30,667	111,781	71,066

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、Web 上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。

所見票閲覧システム URL <https://wwwj.rikkyo.ac.jp/kyomubu/etsuran/top.html>

※閲覧にあたってはV-Campus ID／パスワードが必要



3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

担当科目の以下の集計結果をアンケート実施1~2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載し、これらを基に、科目担当者に所見票（p.16にサンプルを掲載）の執筆を依頼した。

- ・集計結果票（p.15にサンプルを掲載）
- ・「記述による評価」一覧票
- ・アンケート元データ

3-2 学部等

以下により集計し、2)の結果と科目担当者が執筆した所見票を送付の上、学部等総評の執筆を依頼した。

1) 集計の方針

集計の方針は、以下のとおりとした。

- ①学部等別・学科等別に集計する。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計実施の有無は、学部等の判断に委ねる。
- ③科目選定方針が「学部等の必要性に応じた選定」である本年度は、全学集計は行わない。また、全学部等間の設問項目別平均値の一覧表は作成しない。

2) 集計内容

①回答者数・回答率

アンケート回答者数を学部等別、学年別に集計した（合計も記載）。また、アンケート実施科目について学部等別の回答率（回答者数/履修者数）を算出した（p.67参照）。

②平均値に関する集計

平均値に関する集計は、下表のとおり行った。

集計単位 提供した 集計データ	学部等別 ^{*1}	学科等別 ^{*1}
設問項目別	● ^{*2} (pp.68-80参照)	●
学年別	●	●
授業規模別	●	●

*1) 学部等には、当該学部の結果を提供

*2) 学部等には、設問項目別に回答割合を示した帯グラフも提供

なお、2013年度より、アンケート設問項目の「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、以下の通り数値を置き換え算出している。

・ I 1) 出席率

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、
「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

・ I 6) 授業時以外に学習した時間

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、
「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

③設問項目間の相関

全設問項目間の相関係数を学部等別、学科等別に算出した。特に「IV4) この授業を受けて満足した」と他の設問項目との関連の強弱を明示した。学部等には、当該学部の結果を提供した。

④グループ集計（実施学部のみ）

グループ内の科目間を比較するデータとして、設問項目ごとの科目別回答割合を示す帯グラフ（p.17 にサンプルを掲載）、科目別平均値一覧表およびレーダーチャート（p.18 にサンプルを掲載）を提供した。

【2018年度グループ集計実施学部】

経済学部

経営学部

サンプル <科目担当者へ通知する集計結果票>

2018年度春学期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	土	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時限	4	教室	N212	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、()内はパーセント							1から5の数字の平均

*②-⑦, ⑧)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	90.71	*1
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82	
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16	
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36	
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95	
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	0.72	*2

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21	
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00	
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91	
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00	
5) 十分な静肅性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73	
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05	
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6 (11%)	5 (9%)	3.47	
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5 (9%)	4 (7%)	3.11	
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98	

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00	
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22	
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66	
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31	

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09	
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14	
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	

次ページ以降に、「記述による評価」一覧票を表示します

*1) 「5:90%以上」=100 「4:70%~89%」=80 「3:50%~69%」=60 「2:30%~49%」=40 「1:30%未満」=20として平均を算出

*2) 「5:3時間以上」=3.5 「4:2~3時間」=2.5 「3:1~2時間」=1.5 「2:1時間未満」=0.5 「1:0時間」=0として平均を算出

サンプル <科目担当者が執筆する所見票の書式>

2018年度春学期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価01 開講曜日 土 開講時間 4 担当者 立教 太郎 教室 N212 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー
■	■	■	■	■	■	■

*「無」, 「1」は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上, 4:70~89%, 3:50~69%, 2:30~49%, 1:30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
- 5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った
- 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5.0時間以上, 4.2~5.0時間, 3.1~4.2時間, 2.1時間未満, 1.0時間未満)

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話し方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な静粛性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
- 7) 板書のしかたが適切だった
- 8) 映像授業教材 (パワーポイント、ビデオなど) の利用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

III. この授業からあなたには次のものを得ることができたと感じますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方や発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学問的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

授業評価に対する担当教員の所見

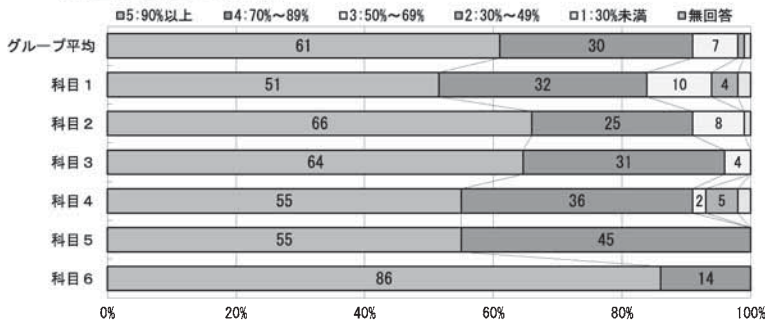
記述による評価に対する担当教員の所見

改善に向けた今後の方針

サンプル <学部等へ通知するグループ集計結果>

1) 設問別帯グラフ (5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 9:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答)

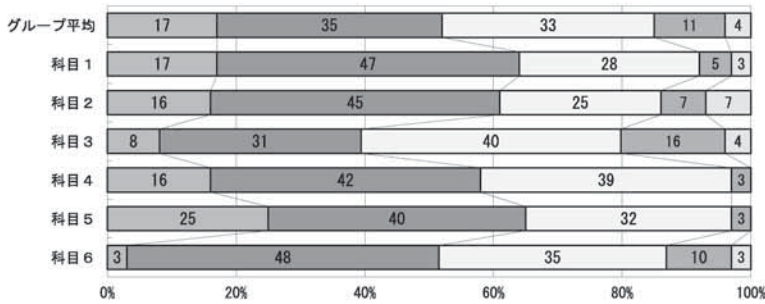
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*1	平均*2	無回答
グループ平均	113	94.87	-
科目1	19	96.90	-
科目2	15	96.00	-
科目3	20	95.67	-
科目4	21	97.87	-
科目5	18	86.89	-
科目6	20	92.22	-

*1 「無回答」は除く
*2 I-1の平均値の算出方法は表紙に記載

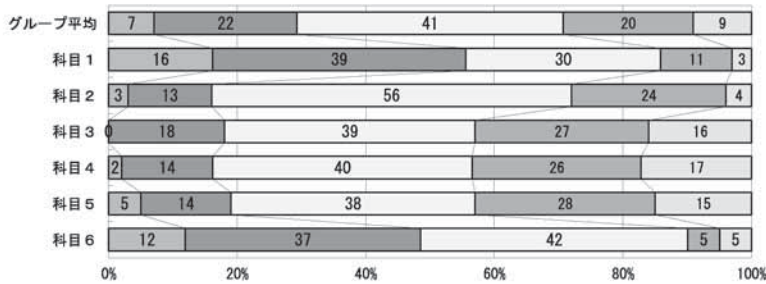
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目1	18	3.72	-
科目2	15	3.69	-
科目3	20	3.20	-
科目4	21	3.78	-
科目5	18	3.90	-
科目6	20	3.46	-

*「無回答」は除く

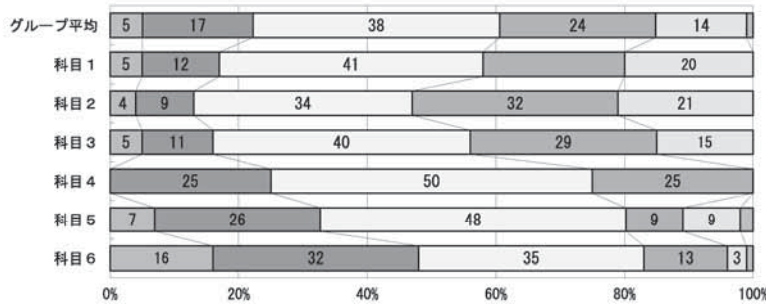
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目1	19	3.58	-
科目2	15	2.76	-
科目3	20	2.65	-
科目4	21	2.63	-
科目5	18	2.93	-
科目6	20	3.67	-

*「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



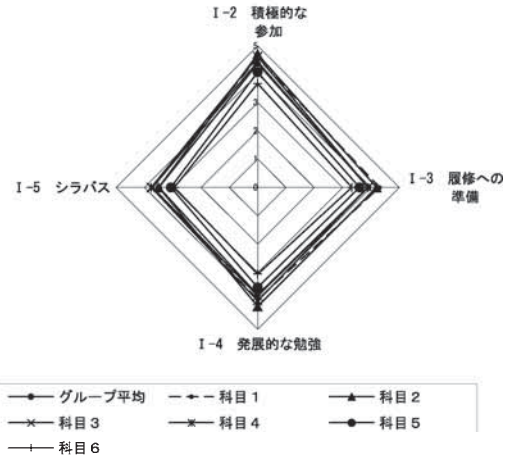
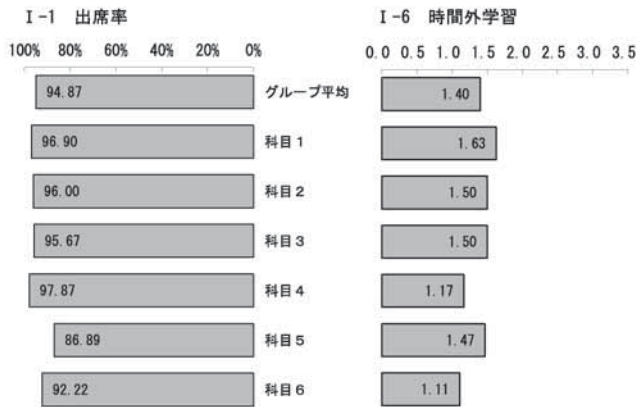
	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	2.98	2
科目1	19	2.60	-
科目2	15	2.42	-
科目3	20	2.67	-
科目4	21	3.09	-
科目5	18	3.12	1
科目6	20	3.56	1

*「無回答」は除く

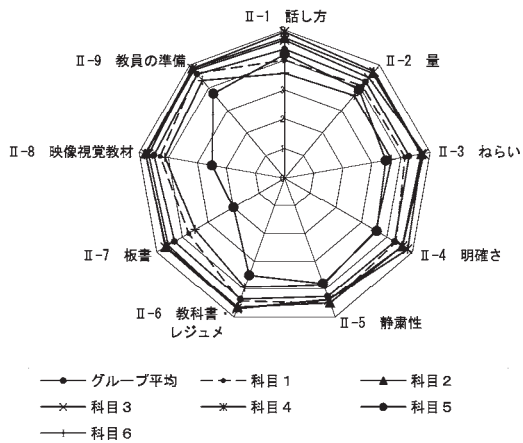
2) 平均値のレーダーチャート

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)

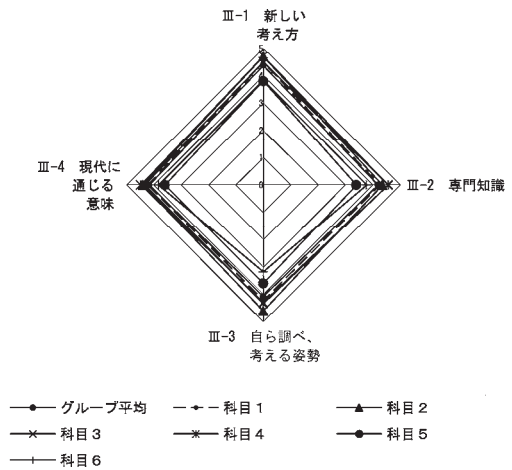
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



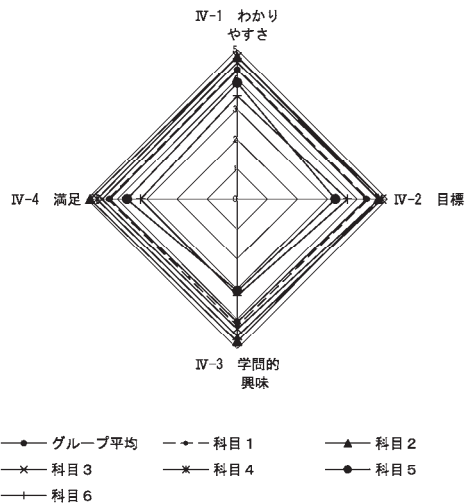
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（学生の意見に関する内容を含む）
4. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2018年度については、導入ならびに基礎科目を中心として調査を行う方針を立て、以下の科目を選定した。

(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目

- ①1年次必修科目
- ②1年次で履修可能な科目
- ③2年次必修科目
- ④2年次で自動登録となる科目

(2) 文学部基幹科目

(3) 各学科・専修で必要と認める科目

なお、学部による設問項目については、前年度を踏襲した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート実施科目数は合計123科目で、内訳としては春学期60、秋学期63科目であった。調査対象となった科目の総履修者数は9,620名で、そのうちの69.11%にあたる6,648名から回答があった。この回答率は全学平均(63.58%)より高かった。昨年度の回答率(66.62%)から、文学部としては継続的に一定の回答率を確保している。

学年別の回答者数を見ると、1年生2,716名、2年生1,886名、3年生1,336名、4年生584名、その他が126名となっている。導入教育を中心に学科・専修ごとに科目を指定し、それぞれの動向を把握するというねらいに対応した分布になった。

I 「授業への取り組み方について」

文学部において、I1「出席率」は昨年度の92.17%から92.38%へ、I2「授業参加の積極性」は4.03から4.06へ、I3「十分な準備」は3.51から3.56へ、I4「発展的な勉強」は3.43から3.48へ、I5「シラバスの有効性」は3.71から3.77へ、I6「授業時以外の学習時間」は1.06から1.11に上昇した。

II 「授業の進め方」

II7「板書のしかた」を除く全項目で4点台となっており、昨年度同様全体的に高い評価が与えられている。II5「授業の静粛性」については、昨年度と同様、教室規模によって大きな差があらわれている。50名以下の教室では4.48であるのに対し、151名以上では3.72である。大規模教室での静粛性の確保は、引き続き大きな課題として残る。なおII7「板書のしかた」は昨年度が3.80、本年度は3.91である。II8「映像視覚教材」とII9「教員の授業準備の周到さ」は4.24と4.34という高い数値を保っている。II9は101～150名規模の教室でも4.36という高い数値を出しており、静粛性の問題はあるにせよ、教員側は大人数講義において、より一層綿密な準備を行って授業に臨んでいることがわかる。

III 「授業から得たもの」

III1「自分にとっての新しい考え方」とIII2「基本的な専門知識」はともに4点台となっており、相応の効果があがっているように思われる。III3「自分で調べ、考える姿勢」は3.77である。これは教室規模に応じて、大教室ほど大きく落ちこんでいく。

IV「総合的評価」

4点台の項目が多く、全体としてはある程度の水準が保たれたといえよう。いずれの項目も学年が上がるごとに評価が上昇しているように見える。3点台後半とはいえ、151名以上の大教室授業において、IV3「学問的興味をかきたてられた」、IV4「満足度」が3点台であるのはやむを得ないだろう。

V「学部等による設問」

V1「教室の大きさ」、V2「受講者数」それぞれ4.21、4.15であるものの、受講者数が上記の通り、満足度と連関しているならば、大人数授業の是正が必要なのではないか。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が学生の評価と向き合い、その内容を正面から受け止めて、今後の改善策を探ることにつなげようとする姿勢を表明している。特に、評価が低い項目についてはそうした傾向が強い。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

「所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約」を、ということであるが、一々の記述が、個々の教員と学生の拈華微笑、一期一会のとりかえようのない学びの現成であると見れば、それを集約したものは、教員と学生の円いにある無数の道得のポリュフォニーであろう。そのようなものとして傾聴するほかにいかに貴重な一語の連環である。

2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

「担当教員の所見のまとめ」を浅学を恥じつつ敢て行えば、或従知識或従経巻に接して道元が「全自己の経巻」「全経巻の自己」と応じているように、而今の逃れようのない場に全身全霊で立つものとして多くの教員が、寄せられた声に傾聴し、活眼睛、活拳頭というほどに、今後の授業に活かそうとする姿勢を見せていることには深く首を垂れるほかない。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

各授業における一期一会の交わりとそこにある真実の探求の円いが、わずかに数字に転換され、切なく数語にとりまとめ尽くしえないものであることは言うまでもない。しかし、それにもかかわらず、一々の教員、一々の学生の誠心に深く思いをはせるならば、絶えず人間の深淵を虚心にまなざし、人間の弱さや傲りに絶えず向き合うほかないことは、本アンケートがその全体をもって「改善に向けた今後の方針」として示すものである。

4. 今後の改善に向けて

本アンケートの個々の教員と学生の道行きを今後の導きとして仰ぐならば、各人が自覚するところを深めゆくことに、また、その営みが真理においてなお深く一致するところを志すその思いにこそ、「今後の改善に向けて」という、そのさらなる善性へと向かいゆく無限のエペクタシスの動性があり、また個々のアレーの結合としてのアガペーの活路も開かれうると信じられる。我々はこの甦りと変容の相生の道行きに謙虚に傾聴すべきだろう。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2018年度の選定方針は概ね以下の通りである。

- ・「講義科目1 教員1 科目」の調査は実施しない。
- ・アンケートは原則春学期に実施するが、通年科目については秋学期に実施する。ただし、過年度通年科目であった経済学1・2は、春・秋学期で担当教員が異なるため、春・秋学期に実施する。また、簿記1・2は同一教員のため秋学期のみに実施する。
- ・共通シラバスを用い、授業の目的および内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目および積み上げ方式の1年次科目についてアンケートを実施する（とりわけその基幹科目については、グループ集計を行う）。

アンケートのねらいは、学生側からの授業評価を通じて、今後の授業改善のための課題を各々の教員が認識することにある。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2018年度のアンケート実施科目数は67科目（実施予定科目67科目を全て実施した）、回答者は延べ3,304名となった。履修者数と比した回答率は77.21%と全学平均(63.58%)を大幅に上回り、グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター、学校・社会教育講座に次いで高いものになった。回答率が高かった要因として、実施対象科目の中心が1年次の必修あるいは自動登録科目であり（延べ回答者の9割が1年次生）、学生の講義への出席率が相対的に高かったことが考えられる。

項目別平均値をみると、「Ⅰ この授業へのあなたの取り組み方について…」の中の「Ⅰ6 この授業に関連して、授業時間以外に学習した時間」の平均値が1.28であったことを除いて、全ての項目で3.50以上の数値が算出されている。また、2017年度の項目別平均値と比較した場合、ほぼ項目全体において、わずかではあるが平均値の上昇が観察された。

なお、授業時間以外に学習した時間の平均値については、回答項目を数値に置き換えて（「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0）平均値を算出しているため、経済学部の学生の平均的な授業時間以外の学習時間は1-2時間をやや下回る水準となっていることがわかる。

それ以外の項目のうち、相対的に平均値が低い項目としては「Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」が3.50、「Ⅰ5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」が3.54であり、その二つの項目は改善の対象となりうることを示している。

特に、「Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」の項目が全ての項目の中で相対的に低い水準であったことについては、今回のアンケートを行った科目が1年次向けの導入期に該当する科目であったことを踏まえ、授業内容の基本的な専門知識を理解することに注力したために、発展的な勉強を行うための十分な時間がとれなかった可能性や、あるいは当該科目の内容を発展的な勉強へとつなげられるような学問的関心が十分に喚起されていない可能性などが考えられる。実際、「Ⅲ この授業から得ることができたもの」の各項目が3点台後半にとどまっていることを考えると、後者である可能性が高い。このことは学部全体として学生、とりわけ初年次学生に対して、学問の楽しさや現代経済への関

心を高める試みが必要であることを示唆していると言えよう。学年別平均値でも同様の傾向を見ることができ、この課題は全ての学年において共通しているとも言えるだろう。

また、授業規模別平均値に関しては、規模が小さいほど平均値が高い傾向がみられる。これは今回のアンケートで100人を超える授業規模の科目が11と少なく、全体の8割程度が「基礎ゼミナール1」のような演習科目および「簿記2」「情報処理入門1」のような実習系科目で、教員の目の届く指導が行われたことを反映しているものと思われる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経済学1、経済学2、簿記2、情報処理入門1、統計学1、基礎ゼミナール1を抽出してグループ化し、集計を行った。基礎ゼミナールについては、担当者（専任・助教・兼任）別にグループ化したため、総計8つのグループ集計を行った。

3-2 グループ集計の結果の概要

1) 必修科目

必修科目のグループには、「経済学1」、「経済学2」および「簿記2」が該当する。

「経済学1」、「経済学2」（および「経済学1」と「経済学2」の旧カリ通年科目である「経済学」）はそれぞれ共通シラバスの下、「経済学1」は複数の専任教員のみによって講義が実施され、「経済学2」は複数の専任教員と兼任講師によって講義が実施された。これらの結果を見ると、全員が専任教員で講義を行っている「経済学1」については、やや個人差はあるが全体的なばらつきは小さいものになっているのに対し、「経済学2」については、それぞれの担当者間で大きなばらつきが出ていた。特に、その中でも教員歴の長い専任教員の評価項目が全体的に高い平均値となっており、このことは兼任講師も含めて、評価の高い教員の教授法をいかに全体で共有化していくかということが今後の大きな課題となっているだろう。これについては、経済学部のFD（ファカルティ・ディベロップメント）とも関連させて、教員の教育力向上のための仕組みをどのように構築していくかも含めて考えていく必要があると思われる。

なお、「経済学1」については、担当者および設問項目のばらつきは小さかったが、個々の項目では教員間のばらつきが存在しており、「IV1 わかりやすい授業だった」「IV2 授業全体の目標が明確だった」「IV3 学問的興味をかきたてられた」「IV4 この授業を受けて満足した」の項目で総体的に高い評価を得ていた専任教員の教授法についても、その授業の進め方や話し方などについての特性を分析し、同一の科目担当者間での情報の共有化を進めていくことが必要となるだろう。また、旧カリ通年科目の「経済学」については、受講者の人数が少なかったこともあり、少人数教育の科目と同様に、授業に対する学生の満足度は非常に高いものとなった。

一方、「簿記2」は、その科目特性もあろうが、担当者ごとに大きなバラつきが生じている。兼任講師への依存度が高く、情報の共有が難しいグループではあるが、個別の担当教員との連絡および「簿記2」を担当している専任教員および兼任講師間での情報の共有化の機会を行う必要があるように思われる。

2) 1年次自動登録科目

1年次自動登録科目に該当するグループには、「基礎ゼミナール1」や「情報処理入門1」、「統計学1」が該当する。

「基礎ゼミナール1」および「情報処理入門1」については、全般的に評価は高かったが、「基礎ゼミナール1」の兼任講師が担当する授業では学生の授業に対する満足度が著しく低いケースも存在していた。この点については、基礎ゼミ担当者会議において、情報の共有化を図りながら、その原因の分析と今後の対応についての検討を行った。なお、「基礎ゼミナールI」については、「自分で調べ、考える姿勢」が身についたとの回答割合が高く、教育目的が果たされているように思われる。理由のひとつは、共通テキストの利用や定期的な担当者会議の開催を通じて授業情報および授業運営の共有化を行っていることにあると思われる。とはいえ、クラスによっては授業の「静粛性」やその他の満足度に関してバラつきが見られることから、今後、科目担当者会議などの場を通じて静粛を保つ環境づくりや、学生の授業に関する意欲を高めるための工夫について議論するなど、全体的に授業の水準を高めていくような努力を続けたい。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

アンケートを実施した67科目について、全ての所見票が提出された。

所見の記述量は教員によって差異があるものの、内容的には、板書、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）およびレジュメなどの配布資料等について改善を求める学生からの指摘に対し、多くの教員が真摯に受け止め、改善に向けて努力する姿勢が示されている。静粛性について改善の余地があるとの所見も見られた。

特に1年次向け科目が多かった今回の所見では、先の「集計データにみられる結果のまとめ」でも問題視された、経済学および現代への興味関心を引き出すことや、発展的学習への意欲向上にあまりつながらなかったことに苦慮されているコメントが見られた。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

「基礎ゼミナール1」の授業においては、学生の満足度が高いクラスでは、「相談しやすい雰囲気であった」、「説明が丁寧であった」、「どんな内容にもプラスのことを言ってくれた」、「経済の知識がついた」、「プレゼンテーションをする機会が適度にあってよかった」、「お互いに話し合うことができたと思う」、「授業が堅苦しくなく、知識を学ぶことができた」、「プリントが分かりやすい」、「分かりやすい、楽しく学べた」、「レジュメやレポートをどのように作るのかを学べたし、経済についてもっと知りたいと思った」、「新聞の記事の切り抜きとそれに関連する資料を毎回読むのが楽しかった」、「輪読で使った本がとてもわかりやすくよかった」という意見が寄せられており、学生が話しやすく、主体的に授業に参加できるような雰囲気の構築や、学問のおもしろさを実感させるような教材等の工夫によって、授業の満足度が高められていることを具体的に確認できた。

また、「情報処理入門1」の授業で学生の満足度の高いクラスでは、「楽しかった」、「効率的な授業だった」、「教え方が丁寧」、「学生の進み具合をちゃんと見ていて、置いて行かれ

る人がいない授業だった」という意見も寄せられており、個々の学生の理解度に応じた授業の進め方を行うことで、学生の授業の満足度を高めていくことができるということが示されていた。

なお、授業に対する学生の要望としては、「少人数授業のため、グループワークを増やしてほしい」、「すぐ発表できないので考える時間をとってけると良い」、「各授業ごとに量を均等にしてほしい」、「もっと話しやすい環境を」、「内容が難しかった」、「教室が静かな状態で学習したかった」などの意見が寄せられていた。

以上のように、記述による学生の意見は多様性に富んでいるが、例年同様、教員の説明（声の大きさ・スピードなど）や配布資料・教材の内容についての意見が寄せられる傾向にあった。その中で、理解を深めるための小テストや練習問題などが有効であったとの記述がある一方で、声が聞こえにくい、私語がうるさいというコメントや、それに対して教員の行う注意が細かく、厳しすぎるとの記述もあった。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的な評価に対しては、それをさらに改良していくことが記されている。否定的ないし改善を求める学生からの指摘については、多くの教員が真摯に受け止め、改善に向けて努力する姿勢を示している。また今後の改善のための努力には、私語への対策や受講生全員が主体的に授業に参加する意識を醸成すること、リアクションペーパーを使った理解度の確認および授業後に課題を示すことで学生の予習・復習のきっかけづくりを行うことなどが挙げられている。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

学生の理解を助け、知的欲求を満たすために各教員が細やかな継続的取り組みを実践していることが読み取れた。とはいえ、レポートや毎回出される課題の整理・採点、アクティブ・ラーニングのための準備などが負担になっていることも否めない。細やかな対応を要する初年次教育だけに、学生の希望の何に、どこまで応じるかという問題があるため、教員同士の情報の共有は不可欠であるとともに、学部として初年次教育の在り方を引き続き検討・改善していくことが求められる。

5. 今後の改善に向けて

アンケート対象科目の多くが1年次生向けの基幹科目という特性もあって、全体を通じた授業への出席率は9割を超え、積極的・意欲的な学生の授業参加の姿を確認できた。それにもかかわらず、授業時以外の学生の主体的な学びの時間増加につなげること、授業を契機として発展的な学びへの関心を引き出すことに関しては課題が残されていることが明らかになった。

特に、1年次の科目は、その後の学生の研究・学習意欲に対しても大きな影響を与えるため、発展的な研究意欲を高める工夫を行うことが必要とされている。現在、経済学部教育制度検討委員会でも「基礎ゼミナール」の内容をいかに充実させるかということについて検討を行っており、各担当教員間での「良い授業」の共有化や、アクティブ・ラーニングの授業手法に見られるように、主体的に学生が授業に参加して学ぶ楽しさを実感させる

ような工夫が必要とされている。

今回アンケートを実施した科目の授業は、アカデミック・スキルを修得させる内容が多くの割合を占めてしまう傾向にある。教員はその授業での学びが歴史的、理論的、実践的にどのような意味をもっているか、積極的にその意義を伝えられる授業内容の再検討が必要であろう。また、そうした教授の結果、学生が感じ、考えたことを学生同士が披露し、議論できるような雰囲気・環境づくりの努力も続ける必要がある。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2018年度は、「学部等の必要性に応じた選定」という全学的方針に基づき科目の選定を行った。これまで理学部では各学科とも、経年変化を調査するために、毎年度なるべく同じ科目を選定する方針で行ってきた。2018年度は、数学科では新カリキュラム（2010年度より移行）で新規に設計した必修科目・選択必修科目を、物理学科では原則として複数教員担当科目を除くすべての講義科目を、化学科では原則として必修講義科目ならびに選択講義科目（複数教員担当科目を除く）を、生命理学科では原則としてすべての講義科目（複数教員担当科目を除く）から教員1名あたり複数科目にならないように科目を選定した。共通教育科目については、独自にアンケートを行うため、例年通り非実施であった。また、理学部独自の設問についても、前年度を踏襲した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は64.70%であり、全学平均（63.58%）と同等であった。また、昨年度の理学部の回答率（64.38%）とも同等であった。学年ごとの延べ回答者数は1年生1,573名、2年生1,531名、3年生976名、4年生182名であり、昨年度に比べると、1年生の回答者数が増加し、2,3,4年生の回答者数が減少した。

各アンケート項目における理学部の平均値を昨年度と比較すると、全27項目中、「(I5) シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」が昨年度と同じであった以外は（I）の各項目は微増であったが、それ以外の（II）、（IV）、（V）の設問項目は、昨年度と同じか減少している。ここ数年微減の傾向が続いていた「(I1) 授業全体を通じての出席率」は、少し改善されたようである。（昨年度92.41→本年度93.29）「(I6) 授業時以外に学習した時間」の平均値は1.39であり、昨年度（1.34）から少し増加したものの、依然として低い水準のままである。「3時間以上」と回答した学生が約10%であるのに対して「1時間未満・0時間」と答えた学生が約40%を超えており、自宅学習に十分な時間をかける学生は多くない。

ポイントの減少が最も大きかった項目としては、「(II5) 十分な静粛性が保たれた」（昨年度4.17→本年度4.07）がある。これは、一昨年度（4.13）に比べても減少している。

その他、「(II2) 各回の授業内容の量が適切だった」（昨年度3.97→本年度3.92）、「(II3) 各回の授業のねらいは明確だった」（昨年度4.03→本年度3.97）、「(II4) 各回の授業内容は明確だった」（昨年度4.05→本年度4.00）、「(II6) 教科書・授業レジュメ・プリントや参考文献が効果的だった」（昨年度4.07→本年度4.01）などがあり、全体としては減少している。

学年間で比較すると、多くの項目において、1年生よりも2,3,4年生のポイントが高い傾向がみられた。その一方で、「(I1) 授業全体を通じての出席率」については、学年が高いほど低くなっている。4年生については、就職活動などが影響していると思われる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

肯定的な評価を受けているという所見が多くみられたが、昨年度よりもII～IVの評価が下がったという所見もいくつか見受けられた。授業時以外の学習時間の少なさ、授業への

参加の積極性について懸念を示す所見もあった。また、静肅性に関するポイントの低下を指摘する所見が複数見受けられた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

「肯定的評価として多い意見の集約」

多様な記述があったが、肯定的な評価としては、レジュメ・プリントなどの資料が役に立った、授業が分かりやすい、解説が丁寧である、質問に丁寧に答えてくれた、演習問題が役に立ったなどがあった。また、資料の配付、映像視覚資料の使用、オンライン授業支援システム Blackboard の利用、前回の授業内容の復習など授業における工夫に関して肯定的な意見が多くみられた。

「否定的評価として多い意見の集約」

否定的な意見としては、説明や板書が速い、板書の字が小さい・読み難い、説明が分かり難いなどの指摘があった。板書での授業進行・映像視覚資料による授業進行については、賛否双方の意見があった。また、教室の構造、マイクや照明などの機器・設備の不備に関する指摘や私語に対する教員の対応についての不満が複数みられた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

学生から指摘された問題点について改善を試みる意思や改善策を示す所見が多数みられた。授業内容が難しい、授業進度が速い、板書の速度が速いなどの指摘がある一方で、相反する意見もあり、それらへの対応の難しさを指摘する所見もあった。また、授業中の私語、授業時以外の学習時間や質問の少なさなど、学習に対する学生の態度や積極性の低さを懸念する所見が複数見受けられた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

受講学生からの意見を踏まえて、資料や板書の改善、話し方の改善、映像視覚教材の効果的使用、学生のレベルを考慮した授業展開を試みるなどのコメントがあった。また、学生の授業時間外学習や授業への積極的参加を促すために、宿題を増やす、反転授業やグループ学習、学生の知的好奇心を刺激する授業内容を目指すなどの改善策も挙げられた。

4. 今後の改善に向けて

多くの教員がアンケートの結果を参考にして改善を試みている。改善の試みが成功しているケースもあるが、思ったほどの効果が得られないというケースも見受けられた。これは、教員自身が自覚しており、更なる工夫が授業の質の向上に繋がると考えられる。全般として授業に対する教員の真摯な態度と努力が見受けられる。各教員が今後もこの姿勢を継続することにより、更に良い授業が展開されていくであろうと期待される。

一方では、授業時以外の学習時間や質問の少なさなど学習に対する学生の積極性の低さを懸念する意見も多い。これについては、授業形態や内容・方法など今後も工夫していくことが必要である。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度導入の現行カリキュラム下の、学部としての授業評価アンケート対象科目選定方針は以下の通りであり、2018年度は、前年度を踏襲した従来通りの選定を行った。

①必修科目はすべて実施する

②講義科目については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う

2012年度カリキュラムでは、従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に学部として基礎教育の充実を目指すことになった。そのため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要である。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、2012年度からは必修科目は全て実施するという変更を行った。また、2018年度は、全学科目選定方針が、「学部等の必要性に応じた選定」として学部の判断にまかされている。社会学部においては、②を2007年度以降選定方針としており、2018年度は講義科目について最低「1教員1科目」を選定し、ほぼすべてこの方針で実施した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 授業規模別

回答者人数が少ない授業規模ほど総じて評価が高くなるのは、社会学部に限らず、例年の傾向である。しかしながら、50名以下を「S」、51~100名を「M」、101~150名を「L」、151名以上を「LL」として、社会学部119科目の結果を見ると、評価がS>M>L>LLという単純な線形的関係でないものが多い。

Sは、「I6 授業外学習時間」、「II5 静粛性」、「II7 板書の適切さ」、「III2 基本的な専門知識」の各項目で評価が高いが、それ以外の項目では、SとMとはほぼ同様であるか、むしろMの方が上回っている項目も多かった。平均が4点台の項目は、IIの9項目中Sが8、Mが8、IIIの4項目中S、Mとも3、IVの4項目中では、S、Mともすべてである。以上から、100名以下のクラスは、いずれも相対的に高い評価を得ていると言える。

また、「I1 出席率」は、Sが89.35、Mが90.97、Lが92.38、LLが92.74と、むしろ規模が大きくなるほど高く、「I2 授業への積極的参加」(3.90~4.02)、「I3 授業履修にあたっての十分な準備」(3.33~3.47)も、規模による違いは大きくない。むしろ、S、Mでこれら2項目はもう少し引き上げるための工夫が求められる。

ただし、II、III、IVの各項目では、LLの評価がどうしても低くなる傾向は否めない。とくにIIIの4項目については、平均3点台の項目は、Sが1、Mが1、Lが3、LLは4であった。「IV4 この授業を受けて満足した」はS4.12、M4.13に比較して、L4.01、LL3.82と下がっている。つまり、社会学部では、LやLL規模での授業における工夫が課題といえよう。

2-2 学年別

昨年度までと同様、「I1 授業出席率」は学年が進むにつれて低下している（1年 93.71、2年 92.64、3年 90.56、4年 86.59）。ただし、「I2 授業への積極的参加」（1年 3.89、2-4年 3.97~4.01）、「I3 履修にあたっての十分な準備」（1年 3.22、2-4年 3.44~3.53）、は、いずれも1年のみ低い傾向がみられる。また、上記項目以外のいずれの項目も、学年が進むにつれて数字が高くなる傾向がみられる。例えば「IV4 授業満足」は1年から4年まで 3.72、4.04、4.14、4.25 であり、4年ほど満足度が高い。こうした傾向は、学年により履修する授業規模が異なることが一因としてあげられる。学年が上がるにしたがって、授業規模が小さくなる傾向があり、2-1 で述べたとおり、LL 規模はどうしても評価が低くなるため、学年ごとの差につながっていると推測できる。また、入学した学生が、学習の進展にそって大学の授業に適應していくことに加え、初年次向けの基礎的な総論よりも、高学年向けの各論や発展的な科目の方が、おそらく学生にとっては興味深いと感じられることも一因であろう。

2-3 学科別

科目開設学科による分類では、全体として現代文化学科の数字がやや高く、共通科目が相対的に低めの数字となっている。例えば「IV4 授業満足」は、現代文化学科 4.23、メディア社会学科 4.17、社会学科 4.15、共通科目 3.86 である。なお、II、III、IVの設問で 4.00 を超えている項目は、社会学科が 15（前年 7）、現代文化学科が 15（前年 15）、メディア社会学科が 15（前年 13）、共通科目は 2（前年 3）であり、その結果として前年までみられた学科間の差はかなりの程度解消されている。その分、共通科目の運営の改善が求められる結果となっている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

例年と同様、授業の静粛性に関する記述は多くみられた。十分に対応しているとの評価も多くみられるとともに、大人数講義で苦慮する見解もあった。とくに予期せぬ形で大人数規模になってしまった場合の授業運営に関して、困難が表明されていた。講義であっても、グループワークなど学生への主体的参加を促す試み、リアクションシートやコメントなどフィードバック機会の確保、映像資料、ゲストスピーカー、オンライン授業支援システム Blackboard システムの活用など、授業の工夫についての記述も多い。授業時間外での学習機会、発展的学習について、促す必要性の認識と具体的な実施の難しさについても記述が多かった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

所見票では、授業に対する積極的評価（配布資料、授業の仕方、視聴覚資料の活用などの工夫）、授業環境（静粛性、温度、調光など）について教員の対応を評価する見解と不十分であることの指摘の両面、授業の進め方の速さ（速すぎる場合の指摘）、展開される概念、議論のレベル（難しすぎる場合）、話し方（声の大きさ、スピード）についての要望などが多くみられた。また、講義内容にかかわる評価もわずかながらみられた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的コメント、改善を求めるコメント、両者とも、積極的に受け止め、よりよくするために役立つ意向が強く表明されていた。授業の進め方や難易度については、多様な学生たちに一律に対応できないことへの難しさも言及されている。授業環境についても、あまりに厳しすぎると授業の雰囲気全体が固くなりすぎ、緩めると不満を感じる学生も多くなるため、調整が難しいことを認識した上で、積極的に取り組む姿勢がみられた。また、講義内容にかかわる評価については、担当教員が論点を検討した上で、妥当でない点には、その理由を説明し、妥当な点には、対応を表明するなど、真摯な姿勢がみられた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

3-1にあるような授業の工夫、配布資料の改善、授業内容の発展・刷新、発展的学習、授業外学習を促す工夫への取り組みの必要性、3-2にある授業環境改善への要望の対応などが多くみられた。

4. 今後の改善に向けて

改善すべき点は、例年のように、静粛かつ積極性のある授業環境を実現するために、大規模授業の減少に努めることである。2014年度から一部の大規模授業で他学部履修者の人数制限を行い、一定の効果があつたと考えられるが、制限していない科目では依然として履修者が非常に多い科目が存在している。このため他学部履修者の人数制限を引き続き検討するとともに、開講曜日・時限などの熟慮を呼びかける。

2012年度カリキュラム改訂で導入した社会学原論、社会調査法、基礎演習などでは担当者会議を設置して、授業の運営や内容について日常的に検討する体制をとっているが、今後も継続的に授業運営および内容の改善に取り組んでいく。必修科目は、内容が自分の好みであるかによらず出席を求められることになるため、学生の満足度が低くなることが想定される。2-2で示した通り、一年生の満足度は低めであるが、結果の解釈に注意して、内容改善を検討する必要がある。教授会等においても一年次向けの教育内容に関する改善の可能性などについて検討している。

4-5 法学部

1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを行うことにした。2018年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを実施する年度に該当するため、教員の希望を調査した上で、合計8科目につき授業評価アンケートを行った。なお、毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しているため、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられるためである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照し、回答率、設問項目別平均値、学年別平均値、設問項目間の相関の結果についてまとめる。

回答率は、33.91パーセントであり、他学部の回答率と比較すると突出して低い。アンケート対象となっている講義科目では、出席が成績評価に反映されない場合が多いことから、授業の出席率が低くなっていることが原因であると考えられる。

設問項目別平均値においては、設問項目Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」（4.48）が非常に高い値を示している。この点については、2018年度の授業評価アンケートの対象となった授業が、全て150名以下の規模のものであったことを指摘しなくてはならない（50名以下1科目，51～100名6科目，101～150名1科目）。授業の静粛性維持のためには、適切な規模で授業を展開できるよう、カリキュラム上の工夫が必要であるといえよう。

また、設問項目Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」（4.37）も、非常に高い値を示している。その他にも、設問項目Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」（4.11）、Ⅱ2「各回の授業内容の量が適切だった」（4.11）、Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」（4.12）、Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」（4.14）およびⅡ6「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」（4.08）が高い値を示しており、各教員が入念に準備を行い、真摯に授業に取り組んでいることが分かる。総合的にも、設問項目Ⅳ1「わかりやすい授業だった」（3.98）やⅣ2「授業全体の目標が明確だった」（4.06）の評価が高く、授業の目標や内容は学生に十分に届いている。

他方、例年と同様、設問項目Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」（2.99）およびⅠ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」（2.99）の値が低い。ただし、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」（1.03）については、改善の傾向もみられる。今後も、学生の主体的な学びを促す方策を検討していく必要がある。

学年別平均値についてであるが、アンケートの回答者の内、1年次生は1名のみであることから、2年次以上の学年別平均値が算出されている。多くの項目において、学年が上がるにつれて値が高くなっており、大学における学習に慣れることで授業の理解が深まることが分かる。

設問項目間の相関においては、総合評価項目であるIV1「授業の分かりやすさ」、IV2「授業目標の分かりやすさ」、IV4「授業の満足度」は、授業の進め方に関する項目であるII1「聞きやすい話し方」、II3「授業のねらいの明確さ」、II4「授業内容の明確さ」との関連が強い。学生が授業のいわゆる「分かりやすさ」を求めていることが分かる。一方、総合評価項目であるIV4「授業の満足度」は、IV3「学問的興味をかきたてられた」と最も強い相関関係がある。単に「分かりやすい」だけではなく、学問的観点からみて意欲的な発展的・先端的な授業も、学生から求められているといえよう。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員の所見では、各教員が、学生の率直な評価を真摯に受け止め、相対的に評価の低い項目があった場合については、次年度以降に改善を試みる姿勢を明らかにしている。

他方、学生の学習時間が短いこと、調査項目III3「自分で調べ考える姿勢」の値が低いことを問題視する所見が散見される。各教員が、学生の学習意欲を引き出し主体的な学びを促せるよう、今後の工夫を約束している。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

本授業評価アンケートとは別に、学期中に教員が学生の意見を集約し、授業に反映させる取り組みに対して、肯定的な意見が多かった。

レジュメ（配布資料）については、分かりやすいという肯定的意見が多い一方、同じ授業についても、分量が多いといった否定的意見もあり、当然のことではあるが、学生によりその評価が分かれる。

冷暖房の不備を指摘する意見が散見され、大教室講義が抱える設備面での課題が明らかになっている。また、授業の終了を待たずに、次の授業の他学部学生が騒ぎながら入室してしまうという問題が生じていたようで、改善を望む意見がみられた。

2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

多くの教員が、学生からの肯定的評価を今後の授業の励みとし、批判的な評価や要望に対して真摯な回答を寄せている。

なお、レジュメ（配布資料）の内容や量についての学生の要望やパワーポイント等の視覚教材を使用してほしいという学生の要望については、各学問領域の特性上、対応できかねることもあるとの所見が散見された。教員にも、配布資料や授業形態について説明責任があると同時に、学生にも、上記の点について理解が必要な面はあろう。

また、兼任講師が私語を厳しく注意したことに対して学生からの肯定的評価が多かった点について、「このような意見があることについて立教大学の学生・教員ともに重く受け止める必要がある」との指摘があった。教授会等の機会に教員間で共有し、今後の課題としたい。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

レジュメ・板書・パワーポイントについて、見やすさ分かりやすさの観点から、改善を約束するコメントが多い。

また、学生の主体的な学びを促すための工夫を約束するコメントもあった。

4. 今後の改善に向けて

2018年度の授業評価アンケートにおいては、質問項目Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」は非常に高い値を示している一方、「記述による評価」や「担当教員の所見」からは、授業中の私語に対する教員や学生の不満は少なくないことが分かる。授業中の私語防止のために、ベストプラクティスの収集および情報共有を継続する必要がある。また、授業の静粛性の観点からは、授業の終了を待たずに次の授業の他学部学生が入室する問題についても対応が必要であろう。入口に貼り紙をするなど、全学的な対応をお願いしたい。

また、2018年度の授業評価アンケートの結果は、例年と同様、授業の進め方（Ⅱ）や授業全体（Ⅳ）について、学生が高く評価していることが分かる。一方、このような高い評価と比較すると、学生の授業以外での学習への取り組みが十分ではない点が残された課題である。前年度、当欄において、学生の主体的・積極的な学習を動機づけられる授業を実現すべく、ベストプラクティスの収集および情報共有を継続する方向性が示された。これにもとづき、2018年度には、教授会、基礎文献講読担当者会議、兼任講師との打ち合わせ会等を活用し、教員間での情報共有が行われた。各授業における改善は、未だ数値には表れていないものの、今後も、教授会、基礎文献講読担当者会議、兼任講師との打ち合わせ会等を通じて、学生に主体的・積極的な学習を促す工夫を教員間で共有し、各授業の改善を進める方針である。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部はこれまで通り、2～4年次演習および BLP・BBL 関連科目を除いて、原則として全科目を対象に、春学期 59 科目、秋学期 45 科目の合計 104 科目で授業評価アンケートを実施した。全科目を指定している理由は、「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。なお、BLP および BBL 関連科目について実施しない理由は、これらの科目が演習系の科目であり、科目の独自性も強いので、大学所定のアンケートでは十分に実態を把握できないからである。学部でも独自に詳細なアンケートを実施していることから、これらの科目を除くことにした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

まず学生側の授業に対する取り組みを示す6項目について、「授業全体を通じての出席率 (I1)」の平均は90.32、「この授業に積極的に参加した (I2)」は3.95と、それぞれ高い数値を示し、回答者は積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。ただし、アンケート実施科目の回答率(回答者数/履修者数)が51.91%と低いことを考慮すれば、アンケートに回答するような積極的に参加する学生と、そうでない学生の取り組み方に差が生じている可能性が懸念される。

それ以外の授業に対する取り組みとして、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた (I3)」(3.62)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした (I4)」(3.54)、「シラバスは受講に役立った (I5)」(3.70)、「授業時以外に学習した時間 (I6)」(1.18)については、2年度続けて数値が向上している。ただし、「授業時以外に学習した時間 (I6)」について、半数を超える学生が1時間未満と答えている。つまり、授業に積極的に参加しているものの、予習・復習などへの意識が低い学生の割合が大きいことがわかる。予習・復習につながる課題の工夫などが継続して必要であろう。

授業の進め方についても、一様に昨年度からの改善がみられた。例えば「各回の授業内容の量が適切だった (II2)」(4.03→4.12)、「各回の授業のねらいが明確だった (II3)」(4.03→4.09)や「教員は授業の準備を周到に行っていた (II9)」(4.22→4.27)の項目はいずれも学生の評価が高まっており、教員の授業改善が一定の成果を上げていると考えられる。また特筆すべきは、「十分な静粛性が保たれた (II5)」に対する評価であり、昨年度の3.94から4.04と大きく改善している。特に大教室での講義で問題となる講義中の私語等に対する取り組みが、各講義において着実に進みつつあることがうかがえる。

授業から得られたものを示す4項目については、いずれも3.79以上と昨年度から平均約0.07ポイントの底上げがみられた。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識 (III2)」が最も高く4.05(昨年度は3.98)で、「自分で調べ、考える姿勢 (III3)」が最も低く3.79(昨年度は3.71)であった。「自分で調べ、考える姿勢」について、学年別に見ると、2年次以上になるとその数値が上がっており(1年3.58、2年3.89、3年3.78、4年3.98)、1年次から2年次にかけて自学自習へ取り組む姿勢がある程度確立されていると推測できる。また、これを授業規模別で見た結果(50名以下4.11、51名～100名3.73、101～150名3.69、151名以上3.77)、50名以下の比較的規模が小さい授業で、より効果的に自分で調べ考える

姿勢が自覚されているようである。この分析から、入学直後の早い段階から自学自習を促す工夫や、受講生が50名を超える授業における対策が必要であると示唆される。

総合的評価の4項目も全てで改善がみられ、最も低い評価でも「学問的興味をかきたてられた(IV3)」の3.94(昨年度は3.89)であり、「授業全体の目標が明確だった(IV2)」は4.06(昨年度は4.01)と最も高い評価であった。また「わかりやすい授業だった(IV1)」や「この授業を受けて満足した(IV4)」もそれぞれ昨年度から0.07および0.08ポイント改善しており、本学部の授業に対する学生の評価は高まっているといえる。ただし、これら総合的評価項目を学年別・規模別にみると、学年が低いほど、また講義の規模が大きくなるほど数値が下がる傾向がある。これに関して、低学年の学生や受講生数の多い授業に対する何らかの対応を引き続き検討していく必要があると思われる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

今回、経営学部では必修科目や自動登録科目である(BLP、BBLを除いた)「経営学入門」、「会計学入門」、「ビジネス概論A」、「ビジネス概論B」のクラスでグループ集計を行なった。これらの科目は複数教員による授業であり、結果・ノウハウを共有することで、より良い授業にしていく狙いがある。

3-2 グループ集計の結果の概要

「経営学入門」のクラスは1年生向けの必修科目であるため、教育効果を意識して、同一規模の4クラスに分けている。その結果、「十分な静粛性が保たれた(II5)」に対する評価がグループ平均4.5と高く、クラス分けの効果が出ていると考えられる。その一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた(I3)」や「授業をきっかけにして発展的な勉強をした(I4)」に対するグループ平均の評価がそれぞれ3.38、3.19と高くなく、必修科目であっても講義内容や学問にさらなる関心を抱かせる取り組みが必要であると思われる。また、同一科目であるにもかかわらず、複数の項目で一つの科目が突出して評価が低い点が散見されるため、クラス割り振りによる影響を少なくするべく、担当教員間で情報を共有するのも有効であると考えられる。

「会計学入門」のクラスでは、2名の教員が合計4クラスを担当した。そのせいもあってか、基本的にはクラス間で際立った差はみられなかった。また「経営学入門」と比較して、「会計学入門」の授業の進め方や総合的評価に関するグループ平均評価が高かった。同じ入門科目として、会計学入門における入門クラスの教え方に関する取り組みを共有することも有益であると思われる。

「ビジネス概論B」ではクラス間で大きな差はみられなかったが、「ビジネス概論A」ではクラスによって評価のばらつきがみられた。教員同士でその要因を共有することで、クラス間での評価の差を縮め、クラス全体での質の向上を期待したい。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」では、評価が比較的高かった項目に対する教員自

身の分析が多くみられた。具体的には、講義内容・レジュメの量の調整や講義内の静粛性の確保に関する取り組みの効果への言及がみられた。評価が低い項目については、その原因（例えば講義で早口で話し過ぎた点）や対応策（発展的な学習に向けた学生のモチベーションの向上）に関する所見がみられた。また、講義によって所見における記述の有無や詳細度にも差がみられたため、今後の検討課題としたい。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の「肯定的評価として多い意見」は、教員の丁寧な説明や教員とのコミュニケーションの機会、発言の加点（発言を促す仕組み）、授業の内容と連動した演習問題の提供、オンライン授業支援システム Blackboard の有効活用、スライドの見せ方、映像資料の活用、グループワークの活用、ゲストスピーカーの起用などに関するものであった。また、授業環境に関して、教室内の静寂性やディスカッションに適したクラス規模に対する肯定的意見もあった。

学生の「否定的評価として多い意見」の中では、教室内での私語の多さに関する不満が目立つ。加えて、教員が話すスピードや適切な声の大きさに対する要望も多くみられた。スライドやレジュメに関しては、字が小さいといった見づらさや不適切な分量を指摘する声が多かった。また、スライドの切り替えスピードが速くてノートが取りづらい、スライドを講義前後に Blackboard など提供して欲しいなどの意見があった。授業内容に関しては、量が多い、難しすぎる、進行スピードが速いなどの意見もみられた。授業環境に関する意見として、履修者数の多さや空調管理などが挙げられた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

「記述による評価に対する担当教員の所見」については、学生の記述が少ない中、肯定的評価の確認や否定的評価に対する改善への言及がみられた。肯定的な評価に対しては、講義の改善による効果の確認として機能しており、授業で用いた資料や学生の接し方の効果などを継続する意見が表明された。また、「興味のある内容だった」などの学生の意見に対して、授業のさらなる向上を目指す意見もみられた。否定的評価に対しては、真摯に受け止め改善にむけて努力する意向が示されるとともに、他の学生や講義の特徴を考慮するとやむを得ないと述べるケースもあった。受講者全てのリクエストに完璧に応えることの難しさが示唆されていると思われる。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「改善に向けた今後の方針」については、例えば授業進行のスピードが速いことやスライド等の講義資料の見づらさに対する改善策が示された。教室の静粛性の確保やディスカッションに基づく双方向型講義のさらなる導入についても言及がなされた。また、学生のやる気や努力を促すために、演習問題のさらなる導入や実例などを用いた実践的内容などを増やしてメリハリをつける方策を取り入れる意見がみられた点である。興味深いのは、2019年度以降に始まる100分授業を意識したさらなる取り組みへの意思もみられた。

5. 今後の改善に向けて

2018年度の評価結果をまとめると、比較的高い評価を得ており、昨年度の値から改善している項目も多く、経営学部では講義の改善が着実に進んでいることがうかがえる。今後のさらなる改善が望まれる点として、学生の授業に対する取り組みが挙げられる。例えば、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」はまだ改善の余地があり、授業時以外での学習時間も決して十分とは言えない。また、授業から得られたものを示す4項目のうち「自分で調べ、考える姿勢（III3）」もさらに高められるだろう。回答結果から、毎回出席して授業には参加している学生であっても、講義外の時間では学問から離れてしまっている点が示された。この課題については、講義形式や受講生の多さが異なるため、一律に論じることは難しいが、より実践的な内容を盛り込んで学生のモチベーションを高めるとともに、演習問題や課題を通じて事前にテキストを読ませたりするなどの講義への準備を促す工夫が必要であろう。

また、学生自身から寄せられたコメント（記述による評価部分）にもしっかり耳を傾け、講義を継続的に改善していく必要がある。教員間で講義を相互に観察する機会は乏しいため、学生による評価は、教員に講義の問題点を気付かせ、改善・発展を促すきっかけとなる。例えば、パワーポイントの活用やレジュメやスライドを印刷した資料の配布は学習にとって効果的であるが、適度な分量、見やすさへの配慮、適度な進度が求められる。双方向型の講義に加えて、学生とのディスカッションやコミュニケーションも教育効果を高めるのに有効である。相対的に少人数の講義で各評価が高いのは、それを物語っている。2019年度からは100分授業に変更され、長くなった10分をいかに有効活用し、学生の満足度を高めるか教員の工夫が求められる。これまで順調に学生の評価が高まってきているので、次年度もその動きが途切れず続くことを期待したい。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

異文化コミュニケーション学部における 2018 年度授業評価アンケートは、学部の基礎科目の専門 4 領域から 1 科目以上を選定のうえ、9 科目について実施した。その内訳は以下のとおりである（カッコ内に専門 4 領域の別を表記）：言語学概論、日本語学概論 A、Introduction to Linguistics（言語研究）；コミュニケーション研究概論、異文化コミュニケーション概論、Introduction to Intercultural Communication（コミュニケーション研究）；通訳翻訳学概論（通訳翻訳研究）；カルチュラル・スタディーズ概論、国際協力・開発学概論（グローバル・スタディーズ研究）。

学部の基幹 4 研究領域の Introduction/概論系の基礎科目の現状を把握し、並行して英語による科目について検証することが、本年度のアンケート実施のねらいである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート実施科目数は、上述のとおり計 9 科目（春学期 5、秋学期 4）であった。のべ回答者数は 456 名、回答率は 74.88% で、全学平均（63.58%）と比較して高いものとなり、全学の回答率の中では、グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター、学校・社会教育講座に次ぐ率である。ただし、前年度の回答率（87.26%）からは 10 ポイントを超える低下も示している。前年度は、主として必修科目を選定して授業評価アンケートを行ったことが、特に高い回答率に結びついたとも考えられる。

アンケートの設問項目別平均値については、以下のように概観することができる。まず、I 群の「学生側の授業に対する取り組み」（6 項目）では、「I1 授業全体を通じての出席率」の平均は 95.55、「I2 この授業に積極的に参加した」は 4.13 とともに高い数値を示し、学生が積極的に授業に参加したことがうかがえる。その一方で、「I6 授業時以外に学習した時間」が平均 1.23 であり、半数近い回答者（220 名）が 1 時間未満または 0 時間と回答していることから、総じて授業への積極性はあるが、予習・復習は限定的であり、また自発的・発展的学習への意欲が低い傾向が見て取れる。

II 群の「授業の進め方」を問う 9 項目では、全項目が 4.00 を超えた数値を示し、教員の授業の準備と運営について学生が総じて肯定的な評価を下していることがうかがえる。特に評価が高かったのは前年度と同様に「II9 教員は授業の準備を周到に行っていた」で、4.65 の高い数値を示している。

III 群の「授業から得ることができたもの」4 項目では、「III3 自分で調べ、考える姿勢」が 3.89 であるほかは、全項目で 4.10 から 4.35 の比較的高い数値が示された。ここから、I 群、II 群で認められたのと同様、授業に対する高いモチベーションが自発的な学びへと必ずしも結びついていない可能性があることが示唆される。

IV 群の「授業への総合的評価」4 項目でも、全項目で 4.20 前後から 4.30 台の高い数値が示された。「IV2 授業全体の目標が明確だった」が最も高く 4.35 であった。II 群における「II3 各回の授業のねらいは明確だった」および「II4 各回の授業内容は明確だった」とほぼ同値である一方、IV 群の「IV1 わかりやすい授業だった」は、4.17 とやや低く、授業の目標・内容の明確さの評価と、授業のわかりやすさとは別次元であることがうかがえる。また、項目間関連の結果を参照すると、「IV4 この授業を受けて満足した」は、「IV3 学問的興味を

かきたてられた」と強い相関関係を示し、「Ⅲ4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」および「Ⅳ2 授業全体の目標が明確だった」と比較的強い相関関係を示している。このことから、現代性と普遍性を持つテーマと明確な授業目標とが、学生の知的好奇心と授業に対する満足感につながっている様子がうかがえる。

授業規模別平均値で、50名以下の科目を51～100名の科目と比較すると、「Ⅰ2 授業への積極的な参加」、「Ⅱ2 各回の授業内容の量が適切だった」、「Ⅱ6 教科書・授業プリント・参考書が効果的」、「Ⅱ7 板書のしかた」、「Ⅳ1 授業のわかりやすさ」の5項目を除き、全項目で50名以下のポイントがより高くなっている。英語で開講された3科目が50名以下規模であるほかは、6科目において70名前後から120名弱という学部としては比較的履修者数が多い規模となっている。51～100名規模の授業において3ポイント台かつ50名以下の授業よりも低い数値を示す項目は「Ⅰ3 学生の授業への十分な準備」、「Ⅰ4 授業をきっかけとする発展的勉強」、「Ⅲ3 自分で調べ、考える姿勢」の3項目である。これらに呼応するように、「Ⅰ6 授業外の平均学習時間」は、50名以下が1.51に対して51～100名が1.23となっており、単純な比較はできないが、少人数クラスの方が学生の自発的な学びにつながりやすいことを示唆している。

3. 担当教員の所見票に関するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

総じて、学生からのフィードバックを参照しながら、授業において学生が評価した点、足りない指摘した点を細かく検証し、よりよい授業のあり方について反省を含めた今後の発展への課題を述べる記述が目立った。注目されるのは、学生による授業への積極的な関わりや自発的な学習等を促すために行った工夫を具体的に紹介すると同時に、なお努力が足りなかったと考えられる点についても具体的に課題を指摘する記述があったことである。個々の教員が自分の担当する授業とその評価について、現状と今後をともに見据えた建設的な態度で対応している点は評価に値する。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生からの高い評価は、教材の使用法と授業の運営法に関することが目立った。教員の話す速度、教科書と配布資料（レジメやワークシート）の明確な使い分け、パワーポイントや動画等の的確な利用、ゲストスピーカーによる講演等について、学生の満足度の高さを反映した意見が目立った。また、小テストやグループワーク、ディスカッションの実施が、学生の授業への積極的な参加を促すものとして歓迎する複数の記述が見られた。その一方で、科目によっては座席が教員によってあらかじめ決められていることに疑問を呈する記述や、少数ではあるが英語科目では英語のレベル、全科目を通じ教員が話す内容、板書、パワーポイントの内容などに対して難しかったとコメントする意見も見られた。また私語に起因する教室環境の改善を要望する意見も若干あった。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

学生からの肯定的な記述を多く集めたものの中で、ゲストスピーカーの招聘、小テストやグループディスカッションなどについて、ねらいどおりの効果を挙げられたかどうかを

中心として教員からの振り返りがなされていた。所見の中で多くを占めたのは、板書、レジュメ、席分けなど、学生から改善を要望された点について、どう対応していくつもりであるのか、についてであった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」まとめ

オンライン授業システム Blackboard 利用による予習・復習へのさらなる対応のほか、レポート発表、グループディスカッション等の参加型の授業の運営への一層積極的な工夫を提言する記述が目立った。具体的な提言としては、SNS の授業への応用の例など、積極的に新しい通信技術を取り込んでいく工夫が注目される。

4. 今後の改善へ向けて

総じて、教員による工夫された授業運営と学生参加型の種々の活動が、高い評価を得ている。その一方で、授業の運営や、内容の提示の方法や手段において改善の余地が残るようである。授業運営面の改善点は、51～100名あるいは100名を超える規模の講義科目においてその傾向が目立つが、意欲に乏しい学生への働きかけが挙げられる。小テスト類やディスカッションでは、学生の積極的な参加を促す工夫を重ねることが、学生の指摘からも教員の所見からも、課題として浮彫りとなっているようである。こうした自発性、積極性への働きかけが、学生の発展的学びや授業外での学習時間などの低数値を示す項目の改善へとつながるだけにとどまらず、学生の学びの質の本質的な改善へと結びつくことが期待される。

4-8 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター

1. 科目選定方針とねらい

2018年度はグローバル・リベラルアーツ・プログラム（以下、GLAP）にとっては開設2年目で、2年次用の必修の講義系科目が新たに3科目開講されたことにより、アンケート実施科目が11に増えた（2017年度は9）ものの、科目数、そして回答者数は依然少数にとどまっている。これは、GLAPでは履修者が概ね10名以下となる演習系科目はアンケートの実施対象から除き、また、講義系と言われる科目においても履修者数は、他学部生、特別外国人学生等を加えても、通常20名台にとどまる少人数授業重視のカリキュラムを展開しているためである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照すると、全般的に2017年度よりも評価は高くなっており、その点は、多くの担当者が2017年度の経験を踏まえて授業改善に努めた成果が出たという面もあると考えられる。ただし、発展的な勉強のきっかけ（I4）、分かりやすさ（IV1）、満足度（IV4）などの重要な項目において、選択科目である英語リベラルアーツ科目（以下ELA科目）に比して、必修科目が低い数値を示す傾向が認められる（例外はあるが）。この傾向は2017年度にも見られ、これに対処するには、個々の科目の授業の場での科目担当者による取組みに加えて、GLAPのカリキュラムの全体像と、そのなかでの必修科目の重要性を学生に十分に理解させるといったプログラム全体としての努力も必要のように感じられる。

GLAPの科目では、出席率（I1）や、授業への積極的参加（I2）などの項目において総じて高い数値が出ており、講義系科目においても多人数授業を避け、できるだけ学生参加型の授業を行おうとしていることの効果が感じられる。教員の授業準備が周到（II9）という項目で高い評価がつけられているのも、そうした授業運営の仕方を履修者が肯定的に受け止めているものと解することができる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生による授業評価のデータは、前項（2.）でも言及したように、科目種別（必修科目と選択のELA科目の別）により、また個々の科目ごとに多少の高低の差はあるものの、いずれの科目についても大半の項目で肯定的な評価となっているため、それを受けての担当教員の所見においても、多くは、各科目の授業の基本方針が学生に受け入れられたことを確認しつつ、評価が相対的に低かった部分について授業の問題点を指摘している。所見の中には、その問題点の指摘を、今後の授業改善の工夫につないでいくことを明言しているものも認められた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の記述意見では、学生参加型の授業をめざすGLAP科目の取組みが肯定的に受け止められていることが感じられるものが多かった。改善すべき点の記述でも、そうした取組みの微調整（課題の難易度の変更、授業における討論部分と講義部分の割合の変更など）によって、より大きな効果が期待できるといったものが多かった。

2) 上記 1) に対する担当教員の所見のまとめ

教員の所見では、上述の学生の基本的に前向きな意見を受けて、学生の意見も踏まえてさらに授業改善の工夫をしたいとするのが基本傾向である。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」、「記述による評価に対する担当教員の所見」での記載を受けて、現状に即した授業運営方法の工夫を行うという声が多く見られた。

4. 今後の改善に向けて

GLAP は、すべての科目で履修者数を少なくおさえ、学生参加の要素をできるだけ取り入れた形の英語による授業を行うという新たな学位プログラムであり、開設 1 年目の 2017 年度と 2 年目の 2018 年度の 2 か年は、授業評価アンケートの対象科目は、本プログラムの性格が特徴的に表れている週 2 回授業の 4 単位科目のみであった。今後とも、履修学生から高い評価を受けたこれらの科目の維持・改善に努めるとともに、2019 年度以降新たに開設される週 1 回 2 単位の 3 年次以上向けのより専門性の高い科目についても、週 2 回 4 単位科目と同様の高い評価が得られるよう、本アンケートを含め、丁寧な点検活動を行っていきたいと考えている。

4-9 観光学部

1. 科目選定方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を設定した。

- (1) 原則として学部方針によって選定する2年間のうちに全教員1回1科目で実施する。
- (2) 演習科目は対象としない。
- (3) 複数教員担当科目は対象としない。
- (4) 集中講義は対象としない。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2018年度の実施科目は47科目、回答者数は4,079名であった。なお2017年度はそれぞれ44科目、4,352名であった。履修者数5,936名に対して回答率は68.72%、全体の平均よりやや上回る数値となっている。学年別にみると2年生、3年生がそれぞれ1,387名、1,524名とそれぞれ全回答者の34.0%、37.4%を占めており、これら学年の学生の意見を色濃く反映した結果であることが想定される。

授業の進め方に関する設問Ⅱ1～Ⅱ9（「該当しない」が6割を越える設問Ⅱ7を除く）に対して約76%～89%（「該当しない」、無回答を除く、以下同）が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答、なかでも設問Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」に対しては、約57.7%が「大いにそう思う」と回答しており、「そう思う」と合わせると88.6%と非常に高い数値となっている。さらに、総合的な評価に関する設問Ⅳ1～Ⅳ4に対して約75%～80%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。昨年度と比較して設問Ⅱは9～10ポイント、設問Ⅳは5ポイント程度高くなっている。これらの結果から学生が授業の進め方に関して高く評価しており、授業におおむね満足していることが読み取れる。

一方、授業への取り組み方に関する設問Ⅰのうち、設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」と設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」に対して、「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生はいずれも50%程度にとどまっている。このことは、設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」に対して、「0時間」または「1時間未満」と回答した学生が約2/3いることの表れでもあり、学生自身がこのことを自覚している様子が読み取れる。設問Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢（をこの授業から得られることができた）」に対して「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生が約62.3%と、設問Ⅲの他の設問と比較すると20ポイント程度低く留まっていることから、学生が授業時以外の学習時間を持つ意識の醸成がなかなか達成できていない状況がうかがえる。設問Ⅰ1「授業全体を通じての出席率」で、全体の69.4%の学生が「90%以上」、25.0%の学生が「70-89%」の出席率と回答していることから、まじめに授業に出席し専ら教室で学ぼうとする真摯な姿勢は見取れるものの、設問Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」ならびに設問Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」を自らの学習によって深めることができない状況が改めて提示されている。

学科別の結果（平均値）を比較すると、全体として交流文化学科に比べて観光学科の値が高い傾向がみられる。最も大きな差異は設問Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」であり、その平均値は観光学科が4.36、交流文化学科が4.02と、学科間の差異は0.34ポイントであった。両学科のアンケート実施対象科目の、一科目あたりの平均回答者数は観光学科71人

に対して交流文化学科 114 人となっている。授業規模別の平均値の結果をみると全学および観光学部ともに大規模化に応じて評価点が低下する特徴がみられるが、両学科の差異が設問Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」において最も大きくなっていることから、調査対象となった授業の規模が両学科の差に影響しているものと考えられる。この他、設問Ⅱ8「映像視覚教材の使用が効果的だった」や設問Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」については若干観光学科が、一方設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」や設問Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」については若干交流文化学科の方が高くなる傾向がみられた。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

全体的に授業運営についておおむね高評価となっていることに対して好意的に受け止め、また励みになっているとの記入が多い。授業準備について映像視覚教材や配付資料等の工夫を行っており、そのことが評価されていると捉えている所見がみられる。

一方、授業出席時に受け身的に聴いていることが中心で、学生の能動的な学習を引き出せなかったとの意見も散見される。全体の結果においても設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」といった項目がおおむね低調となっており、学部全体としても課題とも言えるが、個々の授業においても授業の構成や難易度の設定、あるいは課題の出題状況等に改善の余地があるとして多くの教員が認識を示している。

また、観光学部の特長の一つである、業界の第一線で活躍する兼任講師による所見には、本学部生のオフィスソフトのスキル不足やディベート能力の不足といった、今後の学部の教育内容に関する課題も合わせて指摘されている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

昨年度までと同様、全体としては肯定的評価も否定的評価も基本的にはテクニカルな内容が中心である。肯定的評価の記述としては「わかりやすかった」「理解しやすい」「わくわくした」等の表現がみられ、学生が授業に対して興味をかき立てられ、そのことが授業内容の理解や集中力の維持につながっていることは推し量られる。配付資料やパワーポイント、あるいは写真や映像が用意されていることによってイメージしやすく深い理解につながったとの意見も多く、また、少人数教室で教員との距離が近かったことや参加型・対話型の授業、コメントペーパーへの対応、ゲストスピーカーの活用などについては総じて肯定的意見が多くみられる。少数ながら配付資料が明快で自学習に役立てることができる、という意見がみられたことから、教材や授業の進め方の工夫によっては、事後学習等授業時以外の学習へ結びつけていくことも可能と言える。

否定的評価とされる記述について、内容・表現に粗雑なものも多く見受けられるとともに、教室で担当教員に直接申し出ることによって、その授業の実施中に改善または解決できる性質のものである（たとえば「声が聞き取りにくい」、「文字が小さい」、「パワーポイ

ントのスピードが速い」など)。教室の静肅性が保たれていない場合に教員が注意することについては好意的に受け止められている一方で、スマホを触っていることをいちいち注意するのは「他の学生の時間の無駄」とする意見や、大教室の後方など目が行き届かず静寂な環境が維持できていないことについての意見があり、教員が授業を進めながら同時に学生の学習環境維持のためにどの程の労力をさくべきか、判断が難しいところでもある。SAの活用への要望もあり、今後学部全体として環境維持のための取り組みを多様な形で検討していくことが必要である。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

記述による評価への記載は個別的であるが、基本的には学生からの要望を真摯に受け止め今後の改善につなげようという所見がほとんどであった。個別に見ていくと、「説明が丁寧で理解しやすかった」「資料・パワーポイントが効果的で理解を助けた」との学生の意見が多くある一方、「配付資料のすべてを説明しきれず学生にはかえって煩雑となってしまった」「学生に発言させたことについて効率が悪いといった否定的な意見もあり、リアクション・ペーパーなどを利用していきたい」「オンライン授業支援システム BlackBoard に掲載したところ資料を配付して欲しいとの意見があった」など、学生間でも授業の進め方や難易度について意見が割れており、教員の今後の対処について判断が難しい様子がうかがえる。とある教員が述べているように「理解が追いつかないとの意見があるが、質を保ちつつなるべく理解を助けるような授業運営」を限られた時間、あるいは授業環境の中でどう実現していくか、今後より一層の工夫が求められよう。

さらに、大人数講義等については照明やマイク等機器についての改善の提案もあり、教員の努力の他にも対応できる余地はあるとみられる。このことについては施設担当部署と協議しながら、教員の授業運営の妨げにならないよう図っていく必要があるものとする。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業運営や総合的な評価については好意的との結果が出ていることから、「次年度以降も、寄せられた意見を活かしながら、より効果的な授業運営を行っていきたい」との意見がほとんどである。パワーポイントや配付資料、コメントペーパーや課題の出題、あるいはそれらのフィードバックなど、細やかな対応を図ろうとしていることがうかがえ、この積み重ねが授業準備に対する学生の high 評価に結びついていると考える。

また、様々な学年の学生が履修している授業では、その学年に応じて授業に対する姿勢や理解度が異なっていることが示されており、年次の低い学生に理解させる努力を図りつつ、年次の高い学生の興味を継続させるような工夫が必要との意見もみられた。このことについては個々の教員が本アンケート結果を参考にしながら授業運営を工夫・改善していただくだけでなく、学部全体で意見の共有化を図りカリキュラム編成、履修モデルの提示など改善を検討する必要もあるものとする。

4. 今後の改善に向けて

これまでも本欄では「授業時以外の学習時間を確保できるような意識と生活を身につけるよう誘導する」ための工夫について述べられてきているが、そのためにはできるだけ

学生と近い距離の中で「自分で調べ、考える姿勢」が身につけられるよう、様々な余韻を含んだ授業実施が求められる。平均 100 名を超えるような大人数講義のスタイルで、年次も様々な学生個々に対応していくことの困難さは教員すべてが抱えている課題である。授業時間内で必要最低限の情報を伝えつつ、授業時間外にどのような学習を实践すべきかを課題の出題や配付資料の作り込み、あるいは別の方法で提示するなどを、科目の内容と照らし合わせながら様々に行っていくことが必要であろう。学生を取り巻く社会状況、あるいは大学入学までの中等教育が変化する中、授業に出席し、卒業に必要な単位を取得することのみでは、大学が伝えようとする学術研究の豊かさや深さを充分獲得できないことを、学生に繰り返し丁寧に伝えていく必要がある。

4-10 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

2018年度における科目選定方針は、以下の通りである。

- (1) 学部専任教員（助教含む）1科目以下の実施を原則とする
- (2) 資格科目を優先する
- (3) 演習科目は対象外とする
- (4) 昨年度実施科目を優先する

この結果、今年度は34科目において、授業評価アンケートが実施された。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

学部全体の集計データによれば「授業全体を通じての出席率」（I1）の平均値は92.33で、高い値を示している。また、総合的な評価項目とも言えるIVでは、「わかりやすい授業だった」（IV1）は平均値が4.05、「授業全体の目標が明確だった」（IV2）4.10、「この授業を受けて満足した」（IV4）4.04と、いずれも高い評価となった。なお全項目中、最も高い平均値を示したのは、「教員は授業の準備を周到に行っていた」（II9）で、4.39であり、これらはすべて昨年度を上回る結果となった。

一方で、従来から課題とされてきた、学生自身の主体的学習態度の涵養という評価項目の一つである「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」（I4）は、各年度の対象科目等が異なるため、単純な比較はできないものの2016年度3.34→2017年度3.31→2018年度3.29とさらに低下したが、「自分で調べ、考える姿勢」（III3）は2016年度3.62→2017年度3.63→2018年度3.63と横ばいで推移し、教員の所見欄から、各自の取り組みがなされていることが推察できるものの、依然として課題であり続けていると言えよう。

本学部においてここ数年間で改善された項目である「十分な静粛性が保たれた」（II5）は、2014年度3.99と比べて、2017年度4.17、2018年度4.23に上昇している。この項目を授業規模別にみると、50名以下で4.47、51～100名で4.35、101～150名で4.19であり、50名以上の中規模及び100名以上の大規模クラスにおいても、昨年度より数値が上がり、改善傾向が認められる結果となった。2015年度以降のFD活動や学部全体での情報交換を始め、各々の教員による創意工夫の成果であろう。

他方で、授業への学生自身の取り組み方については、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」（I3）は3.48、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」（I4）3.29と昨年度からいずれも低下し、「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」（I6）も0.83と時間数が減少している。教員所見欄からも、シラバスの「授業時間外（予習・復習等）の学習」の他に、教員各々が授業時間外学習のための課題等を適宜示していることが伺えるが、学部においても何らかの対応策を検討すべきであると考えられる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「概ね妥当な評価である」とする記述が多く、多くの教員から、高い出席率や静謐な環境保持、真面目な受講態度を評価する声が多かった。その一方で、「授業をきっかけにした発展的学習」（I4）や「自分で調べ、考える姿勢」（III3）等、学生の主体的学習態度

に関する項目が、相対的に低い数値であることを問題視する教員の声も少なからずあった。また、視聴覚教材の使用やゲストスピーカーの招請が、授業にリアリティを加え、効果的であるとの見解も共通して見られた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

全体的に肯定的な評価が多かったようだが、少数意見であっても、私語や視聴覚資料に対する教員へのリクエスト、さらには教室環境に対する要望を真摯に受け止め、専門用語のわかりやすい解説方法や配布資料の活用意図の説明など、さらなる創意工夫を重ねようとする各教員の所見がみられた。また一部に、成績評価配分に対する学生からの記載があった旨のコメントもあった。

なお、学生の授業外学習に関連して、課外活動やアルバイト等で時間に追われている学生も少なからずおり、学習環境への配慮が必要であることを伺わせる記載もみられた。授業外学習については、このような実態も考慮に入れ、現実に応じた対応策が求められていると言えよう。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

昨年とほぼ共通しており、①学生がより理解しやすい授業を目指す、②学生に授業をベースに発展的学習を促す工夫を重ねる、③学生が自ら主体的に学べる環境を創る、との観点から、授業内容及び教授法のさらなる改善を図ろうとする意見が大半であった。

さらに 2019 年度から施行される 100 分授業に当たり、学生が主体的に授業参加できるよう時間配分の工夫を行う等の見解も多くみられた。

なお、若干の繰り返しになるが、空調設備や履修者の適正規模教室配置等の環境整備については、今後も教務事務センター等と連携を深め、さらに改善を図っていきたい。

4. 今後の改善に向けて

例年同様、本年度も各教員による授業評価アンケートに対する真摯なコメントが数多く寄せられている。この内容を学部全体の教員で共有化し、積極的に活用していく必要があると考えられる。

これまで、授業時の私語に対する取り組みに見られるように、学部全体の改善活動が、徐々に成果を結んだと考えられる事例もあるが、ここ数年指摘され続けている学生の主体的学習態度の涵養については、個々の教員がそれぞれに工夫を重ねているものの、なかなか根本的な解決の方向性を見出し難い状況が続いていることも事実である。

本学部においては、ここ数年の内に新たな学部再編や新カリキュラム改正等が予定されており、優先して取り組まなくてはならない諸課題もあるが、授業外学習のための工夫事例を教員相互が学ぶ機会を設ける等 FD のあり方についても改善すべき時期ではないかと考えられる。何れにしても、授業評価アンケートの貴重な意見を活用し、学生を取り巻く環境にも目を向けながら、現実的で実効性が期待できる改善方策を開発すべく、具体的提案を試みていく必要があるだろう。

4-1-1 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を選定した。

- (1) 学部専任教員が担当する「学部統合科目（旧カリ「学部共通選択科目）」全科目
- (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」
- (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」

なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象外とした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

回答率が高く、データの信頼性は十分に確保されていると考えられる。「I：授業への取り組み方」については、「I1：授業への出席率」に90%以上と回答した学生が6割以上、70%以上と回答した率は9割以上であった。「I2：授業に積極的に参加した」の平均評定値も3.98と高く、多くの学生が意欲的に授業に取り組んでいる様子がうかがえた。また、「I5：シラバスは受講に役立った」の平均評定値が3.85と高く、シラバスが十分に活用されていたと言える。しかしながら、「I3：授業への準備」、「I4：授業をきっかけにした発展的勉強」については比較的低い値であった。以上はいずれも例年通りの傾向である。

「II：授業の進め方」に関しては、「II8：映像視覚教材の効果的使用」と「II9：教員は授業の準備を周到に行っていた」が平均評定値4.35以上と昨年度に引き続き、非常に高い評価を受けている。そのほかにも、一項目を除くすべてで平均評定値が4を超えており、全般的に聞きやすく、適切な量で、ねらいが明確で、教科書や配付資料等が効果的に使われ、静粛性が保たれた授業が行われていたことが分かった。唯一、「II7：板書のしかた」は3.85と他よりは低い評定値になった。そもそもこの項目は「該当しない」との回答が5割を超えており、対象となる科目が限られていた模様だが、学生の自由記述回答によれば、科目によっては板書の字が読みづらかったようであり、改善の余地がある。

「III：この授業から得ることができたもの」については、「III1：自分にとって新しい考え方・発想」、「III2：授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」が、昨年度と同様に得点が高く、学生が、授業を通じて基礎的な知識、及び、応用的、発展的な学びや発想の双方を獲得できたと考えていることがわかる。ただし、「III3：自分で調べ、考える姿勢」が昨年度同様、他の項目に比べて低い状況であった。

以上より、全般的に学生は授業に真面目に取り組んでおり、教員も周到な準備の上、効果的な授業を行っていることがうかがえる。そのことが「IV：総合的に見て、この授業は…」の平均評定値が全項目で4を超えるという高評価に繋がっていると考えられる。一方で、昨年度と同様に、学生の授業外での主体的な学びにまでは至らない現状も浮かび上がった。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業に対する評価が全般的に高いこともあり、概ね事前に立てた目標を達成できたという評価が教員たちの所見の基調である。しかし、それでも今後の課題として挙げる教員が多かったのが、学生の主体的な学びについての評定値の低さである。学生の積極的な授業参加を

促すために、授業中のワークや課題の出し方などについて既にさまざまな工夫を行っている教員が多いが、全体的には模索中の印象である。担当教員からは、緻密で具体的な内容に基づく所見が提出されていた。その科目に対する過年度の授業評価アンケートの結果や、それを踏まえて本年度に行った工夫とその効果に言及する教員も多く、教員たちの、毎年のアンケート結果に真摯に向き合い、授業改善に役立てようとする姿勢がみられた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

視覚教材や配布資料を活用した授業に対する肯定的な意見が多かった。ただし（詳細な）配布資料があると授業中に眠くなるとの意見もあった。また、大人数授業であっても、学生が記入したりアクションペーパーに教員が返答をするなどの工夫があると、学生は、教員とのインタラクションが感じられると好意的に捉えていた。ゲストスピーカーを用いた授業に対しては、幅広く、専門性の高い内容に触れられたとの好評価が多く寄せられた。

一方、昨年度と同様、授業の環境面に対する否定的な意見が目についた。授業規模と教室規模のアンバランス、空調や照明環境の不適切、特に大教室では私語の多さ、といった意見である。また、他学部・他学科の学生からは、「その学科の必修の基礎的科目を履修済みであることを前提に授業が進められ、つらかった」という意見が複数寄せられた。他学部・他学科の学生にも開かれている科目では、そのことを意識した授業運営が必要である。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

教員の所見は内容も具体的で細やかな内容にまで及ぶものも多くあり、学生からの指摘に真摯に向き合う様子がうかがえる。特に、さまざまな側面で高評価が得られたことに安堵しながらも、授業の内容量や話し方などに関してさらなる改善を目指し、具体的な改善案を述べる教員が多くみられた。教員は授業の内容や運営について、学期中も学生の様子などを見ながら随時調整し、工夫を重ねるものではあるが、やはり授業評価アンケートを通じた学生の具体的な記述による指摘は、教員の授業の質の向上に対する意欲を高め、改善に向けた具体的な取り組みを促す動因として重要な機能を果たしていると思われる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

それぞれの教員が、学生の指摘に真摯に応答し、具体策を述べていた。特に発展的学習や能動的学びを触発すべく、課題の出し方の工夫などの改善方針を記す教員が多かった。教室規模や空調等、授業環境については、教員からも大学に改善を求める意見がみられた。

4. 今後の改善に向けて

例年通り、授業出席率が高く、授業に積極的に参加したと回答した学生も多いにもかかわらず、授業内外での学生の主体的な学びの促進や、発展的な学びを促すことに関して課題を残す結果となった。所見票からは、教員たちが既に授業内課題の工夫、ゲストスピーカーの活用、グループワークの導入など、さまざまな試みを行っていることや、過年度分も含めた授業評価アンケートの結果を参考にしてその効果を検証していることも分かった。このような地道な努力を今後も継続することが重要だと考えられる。

4-12 全学共通カリキュラム運営センター

1. 科目選定方針とねらい

2018年度の全学共通科目では、

- (1) 総合系科目「学びの精神」(FH)
- (2) 総合系科目「多彩な学び」の以下5カテゴリにおける講義系科目(コラボレーション科目を含む)
 - ①人間の探究(FA)、②社会への視点(FB)、③芸術・文化への招待(FC)、
 - ④心身への着目(FD)、⑤自然の理解(FE))

を対象に1教員1科目、また、これらに追加して「立教ゼミナール発展編」の全科目、

- (3) 総合系科目「多彩な学び：⑥知識の現場(FV)」におけるグローバル教育センターが提供する全科目

を対象に、授業評価アンケートを実施した。実施合計は376科目であった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

今年度(2018年度)の全学共通科目の「履修者数」は延べ41,131名であり、これは「学部等別履修者数」からみると全13学部等のなかで1位である。昨年度(2017年度)の「履修者数」が37,321名であり、今年度は約一割の純増となった。今後も「学部等別履修者数」での順位、そして「履修者数」そのものの増加傾向は継続すると考えられる。但し、「回答者数」では27,351名(1年:10,893名、2年:7,960名、3年:5,618名、4年:2,098名、不明:782名)となっており、これにより「回答率」における順位は大きく後退している。今年度の「回答率」66.50%という結果は、昨年度の66.09%よりも改善しており、また全学平均の63.58%を上回っているものの、全13学部等のなかでは9番目となっている。「回答者数」および「回答率」の向上へのさらなる改善努力が求められる。

つづいて、昨年度との比較を中心に、今年度の全学共通科目の「設問項目別平均値」から読み取れる内容について以下に列記する。

「この授業へのあなたの取り組み方について(I)」では、今年度の数値はすべて昨年度を上回る結果となっている。なかでも、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた(I3)」や「シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った(I5)」における平均値の伸びが大きく、これは教員側の取り組み(シラバスの記載内容の充実)に学生側も応え(履修にあたりシラバスを読み込む)、評価している証左であり、こうした好循環が「授業全体を通じての出席率(I1)」の改善につながったと考えられる。但し、「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(I6)」では昨年度0.85から今年度0.86へと微増にとどまっており、さらなる改善努力が教員・学生双方に求められる。

「この授業の進め方は・・・(II)」についても、今年度の数値はすべて昨年度を上回る結果となっている。なかでも、「聞きやすい話し方だった(II1)」や「十分な静寂性が保たれた(II5)」、「映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった(II8)」における平均値の伸びが大きい。また、平均値の数値そのものでは、「教員は授業の準備を周到に行っていた(II9)」が4.42と最も大きく、これはすべての「設問項目別平均値」のなかでも最大値となった。これに対して、3.83と数値そのものが振るわなかったのは、「板書のしかたが適切だった(II7)」である。ほとんどの教員は、「板書」と「パワーポイント」

を組み合わせた授業であると想定されるが、「映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）」を活用した改善努力が実を結んでいるように、「板書のしかた」についても同様に改善努力が求められよう。

「この授業から得ることができたもの（Ⅲ）」についても、今年度の数値はすべて昨年度を上回る結果となっている。なかでも、「自分にとって新しい考え方・発想（Ⅲ1）」では昨年度 4.04 から今年度 4.12 へ、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（Ⅲ2）」では昨年度 3.93 から今年度 4.00 へと改善している。これに対して、「自分で調べ、考える姿勢（Ⅲ3）」では 3.56 から 3.62 へと、今年度の平均値は昨年度を上回ってはいるものの、数値そのものは依然として低い。「相関係数表（全学共通科目）」によると、「自分で調べ、考える姿勢（Ⅲ3）」と「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（Ⅰ4）」は「比較的強い相関」があった。自分で調べ、考える姿勢を得ることで、発展的な勉強への取り組みも高まることが示されている。このことは、単に授業内容の「基本的な専門知識」を正しく理解する・させることだけでなく、授業内容から得た「新しい考え方・発想」をもう一步踏み込んで応用する・させることについて、学生側・教員側ともに一層の理解と努力が求められていることを示唆しているものと思われる。

「総合的にみて、この授業は・・・（Ⅳ）」についても、今年度の数値はすべて昨年度を上回る結果となっている。なかでも、「わかりやすい授業であった（Ⅳ1）」では昨年度 4.07 から今年度 4.14 へ、「授業全体の目標が明確だった（Ⅳ2）」では昨年度 4.08 から今年度 4.15 へと数値の伸びが著しく、また「学問的興味をかきたてられた（Ⅳ3）」では昨年度 3.96 から今年度 4.02 へと改善している。「相関係数表」によると、「わかりやすい授業であった（Ⅳ1）」や「授業全体の目標が明確だった（Ⅳ2）」、「この授業を受けて満足した（Ⅳ4）」と「強い相関」を示しているのは、「聞きやすい話し方だった（Ⅱ1）」や「各回の授業のねらいは明確だった（Ⅱ3）」、「各回の授業内容は明確だった（Ⅱ4）」であった。また、「各回の授業のねらいは明確だった（Ⅱ3）」と「各回の授業内容は明確だった（Ⅱ4）」についても、同じく「強い相関」が確認されている。これらのことから学生側の満足度を押し上げている中身とは、受講する学生側の気持ちを汲み取ろうとする教員側の努力であることがうかがわれる。

「学部等による設問（Ⅴ）」についても、今年度の数値はすべて昨年度を上回る結果となっている。「この授業の教室の大きさは適切だった（Ⅴ1）」や「この授業の受講者数は適切だった（Ⅴ2）」、「この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった（Ⅴ3）」において、平均値の伸びは決して大きくはないが、教務事務をはじめ大学側の地道な努力が見て取れる。

最後に、分析の視点を変え、今年度の全学共通科目データを俯瞰し、その特徴を明らかにしたい。

まずは「カテゴリ」に細分化し、それぞれの平均値を比較したい。ここで目を惹くのは、「知識の現場（Ⅵ）」における全般的な平均値の高さである。なかでも、「この授業の教室の大きさは適切だった（Ⅴ1）」では 4.82、「この授業の受講者数は適切だった（Ⅴ2）」では 4.83、「この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった（Ⅴ3）」では 4.81 と、平均値の数値そのものが非常に高いことがわかる。

次に「授業規模別」に細分化し、それぞれの平均値を比較すると、「この授業へのあなた

の取り組み方について (I)」では、「50 名以下」および「151 名以上」の平均値が高く、逆に「51～100 名」および「101～150 名」の数値が低い、という傾向にある。この凹型傾向は、「この授業の進め方は・・・(II)」や「この授業から得ることができたもの (III)」、「総合的にみて、この授業は・・・(IV)」においても同様に確認できる。但し、「学部等による設問 (V)」での教室環境・設備に関する設問項目では、一転して「50 名以下」から順に、規模が大きくなるほど平均値が下がる傾向にあり、前述した凹型傾向との整合性に欠ける結果となっている。

最後に「学年別」に細分化し、それぞれの平均値を比較すると、全般的に「4 年」の平均値が高いことがわかる。但し、学年が上がるごとに数値が上昇している項目もあれば、そうした傾向が当てはまらない項目もある。たとえば、「授業全体の目標が明確だった (IV2)」では、「1 年」4.05、「2 年」4.20、「3 年」4.20、「4 年」4.29 と、学年が上がるごとに数値も上昇しているが、「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった (II6)」では、「1 年」4.06、「2 年」4.12、「3 年」4.06、「4 年」4.15 と、必ずしも学年と平均値の上昇が連動しない。

以上、今年度の全学共通科目の大まかな特徴として、①「知識の現場 (FV)」の平均値の高さ、②中規模授業（「51～100 名」および「101～150 名」）の平均値の低さ、③「4 年」の平均値の高さ、が明らかにされた。

①については「3. 各カテゴリの総評」において、後ほど詳しく分析がなされるため割愛したい。また、②については、より詳細な実態調査が必要となろう。単に収容人数だけでなく、中規模教室特有の問題が影響を与えている可能性がある。たとえば、本学の 11 号館 A301 教室（収容人数：103 名）などは、その形状が長方形で横長なため、学生の座った席の位置によっては教員の動きを把握しにくく、教員もまた学生の反応を把握しにくいといったように、教室ごとの個別事情が原因となっている可能性も考えられる。この点に関しては、より詳しいデータ収集と個別分析が必要であろう。最後に③については、昨年度の「学生による授業評価アンケート」報告書に記載があるように、「大学での学問のあり方に慣れてきているかが、授業の評価を上げることにつながっている (56 頁)」との印象を今年度も持った。いわば、学生側の基盤的素養の醸成とともに、授業内容（学問）への理解度と満足度も連動して向上するものと考えられる。

3. 各カテゴリの総評

3-1 学びの精神 (FH)

3 年目を迎えた 1 年次生対象の「学びの精神」は、大学での学びのスキルを身につけ、主体的に学ぶ姿勢を養い、立教生として居場所感を醸成することを目的としている。授業以外での学習時間は、2016 年度は 0.68 時間と少なく、学びの精神の趣旨が徹底されていないのではないかと懸念があったが、2017 年度の 0.75 時間から 2018 年度はさらに 0.78 時間へと増加しており、少し改善がみられている。しかし、全学共通科目全体の結果 (0.86 時間) や、1 年次生の全学共通科目の結果 (0.83 時間) と比べても学習時間は少なかった。2018 年度の授業の進め方 (II) ではすべての項目で学生からの評価が上がっており、さらに担当者には趣旨の徹底を図り、課題の提出や授業補助者の活用などを促しているため、より一層の改善に期待している。

授業から得たもの(Ⅲ)と総合評価(Ⅳ)についても全設問項目で改善が進んでいる。授業満足度(Ⅳ4)は、2016年度は3.82、2017年度は3.96とさらなる上昇を期待していたが、2018年度は3.93に後退した。「学びの精神」と同じ授業形態の「多彩な学び1～5」の結果(4.10～4.26)や全学共通科目1年次生の結果(4.00)と比べると少し見劣りするが、一定の評価は受けていると思われる。

設問「高校と大学の学びの違いを感じた(V4)」については4.15と高い評価を受けているが、設問「大学で学ぶ心構えができた(V5)」についてはそれよりも0.26ポイント低い評価であったことは例年と変わらず、2018年度も違いは分かったが心構えができたとまでは言えないと感じている学生が多いことを示している。授業満足度とこれら2つの設問は比較的強い正の相関がみられるので、授業満足度が高いほど大学での学びとは何かを理解していると推測できる。「学びの精神」を履修した1年次生が秋学期以降の学びの自信につながっていくことを期待したい。

Rikkyo Learning Styleは4年目に入ったので、今後はより建設的に検証していかなければならない。1年次に履修するのは「学びの精神」科目だけではない学生が「学びの精神」をどのように位置付けているのか、「学びの精神」がその後の学びにどのような影響を与えるのか、卒業時に振り返ってみて「学びの精神」が役立ったと感じているのかなどを問うことが必要になってくるだろう。

3-2 多彩な学び

1) 人間の探究(FA)

「人間の探究(FA)」を他のカテゴリーの結果と比較してみると、以下のような特徴が浮かび上がる。まず、授業への取り組み方(I)では、授業の出席率(I1)と積極的な参加(I2)、授業の準備(I3)が他と比べてやや低いものの顕著に低いわけではなく、授業をきっかけとして発展的な学習をした(I4)や授業外の学習(I6)はまずまずである。他方、シラバス(I5)があまり役に立っていないことを見ると、おそらく講義そのものは優れていても、シラバスによる紹介や導入、あるいは、講義への準備・心構えへの示唆が弱いことがわかる。授業の進め方(Ⅱ)では、(Ⅱ1)から(Ⅱ9)までの項目が全般に他の多彩な学びのカテゴリーと比較すると低い。(Ⅱ9)にあるように、他のカテゴリーと比べて、やや授業準備が足りないと判断されているが、それでも4.37もあり、低いとは言えない。他方、授業から得ることができたもの(Ⅲ)は、他のカテゴリーと比べて平均的である。このことを考えると、授業の内容は優れていても、それを提示するやり方や授業の進め方の工夫がもうひとつであり、内容の興味深さを十分に伝えきれていない可能性がある。それにより総合的な評価(Ⅳ)もやや低めに出ている。

次に各項目の相関を見ると、授業の進め方(Ⅱ)において、(Ⅱ2)から(Ⅱ4)までが相互に強く相関している。聞きやすさ(Ⅱ1)と授業のねらい(Ⅱ3)、授業の内容(Ⅱ4)の明確さは、総合評価のわかりやすさ(Ⅳ1)、目標の明確さ(Ⅳ2)とも強く相関する。最終的な満足度(Ⅳ4)と相関が強いのは、学問的興味(Ⅳ3)である。これらのことから、授業の各回のねらい(Ⅱ3)が明確に絞られておらず、それにより授業の内容(Ⅱ4)や分量(Ⅱ2)も不満足なものになっていることや、授業の内容がやや漠然としており、十分に絞り込まれていないものと思われること、そして、学生が関心を持つ内容を、うまく捉えき

れずに授業が進められている、といったことも考えられる。しかし、教員の側からは、学生の側に自分で考え調べる態度が整っていない、事前の知識が不十分である、話を聞き取れずにレジュメを欲しがるといった指摘もあり、教員と学生のインタラクションや学生の側の事前準備が大切であることがうかがわれる。一部の授業では、学生から私語への不満が書かれていたとの所見がみられた。教室の大きさ（V1）や受講者数（V2）も上記の点に関連している可能性がある。

2) 社会への視点 (FB)

「社会への視点 (FB)」は、77 の科目に対して行われたアンケートによると、おおむね全学共通科目の平均値を上回る結果となっており、各担当教員の努力と改善の成果がみられた。とりわけ 2017 年度の報告書において平均を下回っていた「映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった (II8)」「この授業に積極的に参加した (I2)」、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた (I2)」という課題点に対して、今回は僅かながらではあるが平均を上回る結果になっている。この点に関しては、学生からの要望に対して、担当教員が様々な工夫を重ねた結果が表れているといえる。一方、「授業全体を通しての出席率 (I1)」については前年と同様に平均を下回っており、注視が必要である。また「この授業の教室の大きさは適切であった (V1)」「この授業の受講者数は適切であった (V2)」「この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった (V3)」について、いずれも全学共通科目の平均を下回る結果となっており、大学としても学習環境に対する適切な整備に取り組むことが求められているといえる。

所見票からは、各教員が学生の意見に真摯に向き合い、改善への工夫を重ねていることが明らかになった。これは授業への積極的参加や、映像視覚教材の使用など、前年度の平均を上回った項目と関連するものが多く、たとえば、リアクションペーパーに授業への感想を書かせて丁寧なフィードバックを行ったり、映像資料を効果的に利用することが高評価を得ているなどの所見が散見された。概して、少人数科目の方が学生からの満足度が高い意見が多かったようである。その一方、教員が抱える問題点として、導入的科目であるために、知識量の違いをふまえ、専門性をわかりやすく解説することに対する評価が大きく分かれた点がある。わかりやすい講義と評価する学生がいる一方、それが専門知識の欠如と評価する学生がいる点をどのように考えるのか、教員の悩みは深い。また多くの教員が苦勞しているのは、「自学への促し」「講義へのより積極的な参画」という点である。知的関心を刺激することだけではなく、それが学生の自学へと結びつくような、さらなる工夫が求められるといえる。

今後も、授業評価を踏まえて、教員及び大学全体が問題点と改善点の解明を行い、一層の改善を重ねていくことが求められているといえよう。

3) 芸術・文化への招待 (FC)

「芸術・文化への招待 (FC)」は、まず他の全学共通科目のカテゴリの結果と比較してみると、以下のことがわかる。まず、授業への取り組み (I) では、(I1) から (I6) まで他のカテゴリのなかで平均的であり、どの項目も突出した特徴を示していない。授業の進め方 (II) についてもカテゴリの平均的な位置にあり、あえて言えば、「人間の探究 (FA)」

よりも少しよい位置にあるが、だいたい同じ傾向を示していると言えるだろう。授業から得ることができたもの(Ⅲ)では、基礎的な専門知識(Ⅲ2)と現代に通じる普遍的な意味(Ⅲ4)が、比較するとやや低い。総合的な評価(Ⅳ)もだいたい「人間の探究(FA)」と同じ傾向にあるとあってよいだろう。全体からしてやや低いのが顕著に低いわけではなく、突出した項目もない。

次に各項目の相関を見ると、これも「人間の探究(FA)」と類似している。授業の進め方(Ⅱ)において、(Ⅱ2)から(Ⅱ4)までが相互に強く相関している。また、ねらい(Ⅱ3)や内容(Ⅱ4)が、総合評価(Ⅳ)のわかりやすさ(Ⅳ1)、目標の明確さ(Ⅳ2)に強く相関している。そして、総合評価のわかりやすさ(Ⅳ1)、目標の明確さ(Ⅳ2)と、学問的興味(Ⅳ3)は、最終的な満足度(Ⅳ4)と相関が強い。これらのことから、授業の分量(Ⅱ2)の問題が、ねらい(Ⅱ3)や内容(Ⅱ4)の不明確さに反映していることや、おそらく、講義準備したものが、刈り込まれずに提示されているのではないかと推測される。

個別の所見票の回答を見てみると、学生側のアクティビティに十分に働きかけなかったという反省が一定数見受けられる。反対にリアクションペーパーなどを通して学生の感想や意見を取り入れた授業は好評である。インタラクティブな授業に改善をしたいという意見も多いことから、教員、とくに兼任講師向けにアクティブラーニングの授業方法についての具体的なワークショップを開催するとよいだろう。授業で事前にパワーポイント資料などの配布がないことに不満を持つ学生もいるが、教員の側としては講義中には注意深く聞いて、考えながらメモを取る習慣を身に付けてほしいからであり、この点を学生に理解させる必要があるだろう。

いくつか大学側の対応が求められる問題としては以下のものがある。期末レポートをウェブで提出できるように改善を求める声があった。縦長の教室の使いづらさを指摘する声もあった。また、レポートでの剽窃が見受けられた。私語の問題がまだ解決されていない授業がある。とりわけ剽窃と私語については、大学全体としてははっきりとした声明をだすべきではないだろうか。

4) 心身への着目(FD)

「心身への着目(FD)」は32科目でアンケートが実施され、2018年度の回答者数は3,468名であった。Ⅰ～Ⅴの設問でほぼ全学共通科目の平均を上回る結果となった。特に総合評価(Ⅳ)においては、4.18～4.34という高い評価を得たことは、授業内容が適切で効果的に授業運営がなされていたことや、担当教員の努力が認められた結果と判断できる。所見票を見ると、アンケートの実施やリアクションペーパーのフィードバックの工夫が効果的であったとのコメントが多くあり、今後も継続してこれらの手法を有効活用していけると良いと思う。しかしながら、授業以外に学習した時間(Ⅰ6)や自分で調べ、考える姿勢(Ⅲ3)はそれぞれ0.72、3.59と平均よりも低く、また前年度からの上昇もみられないため、授業以外の時間にもより自主的に学習できるような仕組みづくりが必要と考えられる。所見票を見ると、100分授業を契機にチャレンジ課題や小テストの導入を試みても良いのではとの意見もあったので、この点に関しては、担当教員と情報を共有して改善に取り組んでいきたいと思う。また、相関係数表を見ると、授業の進め方(Ⅱ)、特に、授業内容の量が適切(Ⅱ2)や授業のねらいの明確さ(Ⅱ3)と他の多くの項目との相関係数が高いという結

果であった。担当教員が焦点を絞って授業内容を計画し、洗練していたことが分かる結果となっている。

評価に対する担当教員の所見については、概ね高い評価を受け担当教員も満足しているとの記述が多くみられた。映像資料やパワーポイント資料を工夫し、有効的であったことを具体的に挙げて授業改善に取り組む事項を示す教員も多く、周到的な準備を進めている様子がうかがえる。そして、嬉しいことに、今年度は大人数授業での私語問題や、前の席に座らず、後ろの席に座る学生が気になり、注意を促すが効果が無いことや、注意をし過ぎると逆に別の学生からクレームがくることを述べる所見が僅かであった。引き続き、出来る限り皆が納得し、落ち着いて受講できる教室規模や履修者数の適正化など、授業環境に関して改善を検討することが望まれる。

5) 自然への理解 (FE)

「自然への理解」では 37 科目でアンケートが実施された。ほとんどの項目で全学共通科目の平均値を上回っている。総合的な評価 (IV) の項目では、いずれも評価が高く受講者の満足度は高い。担当教員の努力によって、適切な科目運営がなされていると言える。

授業への取り組み方 (I) の項目では、授業の出席率 (I1) が全学共通科目の全カテゴリの中で最も低いのが 90%は超えており、積極的に参加した (I2) もほぼ平均値の 4.05 であることから、授業自体への出席状況は概ね良好である。授業の履修に対して十分な準備が出来た (I3) と発展的な勉強をした (I4) については 3.5 以下であり、授業外に学習した時間 (I6) は 1 を切っていることから、受講者が授業時間外の自発的な学習につながらなかったと言える。担当教員のコメントからも、このカテゴリは理系科目が多く、文系の履修者も多い中で自発的な学習につながる取り組みを苦慮している様子もうかがえる。

授業の進め方 (II) については、いずれも高評価を得ている。特に映像視覚教材の使用 (II8) については 4.42 と評価が高く、教員へのコメントにも「映像資料が多く分かりやすい」とあるなど、図や動画の活用が理解の促進に効果的であることが分かる。また、板書の仕方 (II7) の評価は 4 を下回っているが、映像資料により板書しない教員が増えた可能性もあり、アンケートの設問を工夫すべきかもしれない。

この授業から得ることが出来たもの (III) では、新しい考え方・発想 (III1) や基本的な専門知識 (III2) が 4 以上であるのに対して、自分で調べ考える姿勢 (III3) が 3.77 と低い。全学共通科目全体の平均でも 3.62 と低く、授業外に学習した時間 (I6) の短さと通じている。教員のコメントでは、宿題を出すなどの対応を検討しているが、学生の専門外の科目であり大きな負担をかけたくないとの配慮もあった。

「自然への理解」の総合的な評価 (IV) は全般的に高く、受講者の満足度はかなり高い。自然科学への興味をかき立てられたと答えた学生が多く (IV3)、このカテゴリの目的は十分に達せられている。授業目的の明確さ (IV2) とわかりやすさ (IV1) が満足度の高さ (IV4) につながっている。教員へのコメントでは、「解りやすかった」と「専門的すぎる、難しい」の両方があり、基礎知識のばらつきがある中での授業の難しさが垣間見える。

設備 (V) については、受講者に対する教室の規模や設備は 4.2 以上の高い値であるが、コメント欄には「教室が暑い・寒い」「スライドと黒板の併用が難しい」などの意見もあった。

6) 知識の現場 (FV)

全学共通科目の平均値に比べて、昨年度同様に各項目の評価は非常に高く、2016年度報告書の予想を超えてさらに伸びている。ほとんどの授業が定員を設けた少人数科目で、勉学意欲の高い学生が集まっていることを割り引いても、驚異的な結果である。特に GL101 は学生の負担が大きいことは授業以外の学習時間が群を抜いて高いことにも表れており、この努力に担当教員がしっかり応えていることが所見票からも伝わってくる。学生が積極的にかかわっている科目群なので、授業から得られるものが大きく、2018年度はさらにわかりやすく、より興味をかき立てられ、大満足したことが総合評価から読み取れる。それだけにこの授業にかける教員と学生の情熱に並々ならぬものが感じられ、単位数の上乗せを望む声が上がっているのは当然の成り行きかもしれない。GL201 では学生の負担は少し軽減されているようだが、満足度を含む総合評価は GL101 と同様に高い。ただし、これらの授業の担当教員の一部は TA・SA の仕事内容や能力にも高い期待をかけているのではないかと懸念が感じられる。

一方、英語で実施されている授業では魅力的な授業内容や教員の熱意にもかかわらず、受講者数が少ないのが残念である。シラバスや広報活動などを通して学生に伝わるような工夫が望まれる。また、履修した学生の評価にばらつきが目立ち、授業の内容や進行と履修学生の意欲や能力に隔たりがある表れなのかもしれない。少人数科目なので、双方の理解と歩み寄りによって改善できるのではないだろうか。

4. 今後の改善に向けて

集計データからみられる全学共通科目の評価は、全般的に上昇している。これは全学共通科目に携わる、すべての教職員による努力の成果であるといえる。講義を行う側の教員が受講する側の学生の立場を考慮し、適切な配慮を十分に行うことにより、教員側もスムーズな授業運営が確保され、学生側も授業内容への理解を深めることができる。教員・学生双方にとって Win-Win な関係が成立するということである。このような関係構築への地道な努力が実を結んだと考えられる。

しかしながら、今年度の集計データの分析結果からは、今後さらに改善すべき課題も明らかにされている。

まずは、「回答者数」および「回答率」の向上である。平均値の精度をより高めるためにも、早急に対策を打つ必要がある。つづいて、「板書のしかた」といった基本的な点で、現在も改善の余地が残されていることを、教員側は真摯に受け止めるべきである。また、「授業時以外に学習した時間」や「自分で調べ、考える姿勢」に関する平均値の数値そのものの低さからも明らかなように、学生による能動的かつ発展的な学習スタイルの確立に向けた取り組みの強化も喫緊の課題である。これについては、教員側の取り組みだけでは不十分であり、実施主体である学生側の意識改革等も必要となろう。その意味では、「知識の現場 (FV)」において行われている種々の取り組みを、いわばベンチマーキングの対象として位置づけ、分析結果から得られたベストプラクティスを共有することも一計である。最後に、大学側の取り組みとして、中規模教室問題解消への地道な努力が挙げられる。この問題は一朝一夕に解決できるものではないため、たとえば既存の「キャンパス機器利用案内」といった基本情報にとどまらず、その教室で受講した学生の声を集めておき事前に担当教

員へ伝えておくなど、小さな努力の積み重ねが求められよう。

このように改善すべき課題は多岐に渡っている。大学全体が一丸となって課題解決に向けた取り組みを続けていくことこそが、唯一最善の道であろう。

4-13 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

学校・社会教育講座（以下、講座）では、教職課程は毎年度「講義科目を対象に1教員1科目」を原則として実施、他の3課程は重点的科目を絞って実施し、数年で全科目が該当するように計画している。これは継続的評価を行うことにより、各教員の改善や工夫、その評価について検討する資料となると考えているためである。なお、履修者が5名を下回った場合、原則は実施しないこととしているが、最終的には各課程の判断に委ねている。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

講座の回答率は80.76%と、全学平均の63.58%を超えており、GLAPの82.65%に次ぐ高い数値であった。このことは、講座の科目を履修した学生の出席率の高さを示唆しているとも言えよう。また学年別回答者数の偏りは1、2年生が多く3、4年生が少ない点が見られる。これは、1、2年生段階に講義科目が集中し、3、4年生段階では当アンケート対象外となる演習や実習が多く配当されている履修体系となっていることが一因であろう。

次に、講座全体の集計結果について見ていきたい。

I「この授業への取り組み」において、I1「出席率」はばらつきが多いものの平均値が94.91であった。I2「積極的な参加」の評価は4.20、それ以外はI6「授業時以外の学習時間」を除き3.50以上である。I6「授業時以外の学習時間」は0.91となっている。大学設置基準において、講義・演習は1単位45時間、うち授業時間は15時間で授業外の学習（事前及び事後学習）は30時間と規定されている。従って、I6およびI3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」については課題とすべき点である。

II「授業の進め方」においては全項目で4.00以上である。また、4.11とこのカテゴリでは際だって低い結果のII7「板書のしかた」については改善を要すると同時に、学生自身が中学校高等学校の授業での板書を評価基準としていることも推測できよう。

III「授業から得られたもの」においては、III1「新しい考え方・発想」・III2「専門知識」・III4「授業内容の現代に通じる普遍的意味」が4.00以上である。一方でIII3「自分で調べ、考える姿勢」が3.86とこのカテゴリにおいて相対的に低い。これは、学士課程教育をベースとして高度専門職教育をおこなう講座の特性、さらに専門職として共有すべき基礎知識獲得に重点を置かざるを得ず、講義形式が中心となる講座科目の特徴を反映する結果と理解することができる。

IV「総合評価」は全項目が4.00以上であった。このカテゴリの項目で数値が高いことは、各教員が一定の授業改善や工夫をおこなってきている結果を示していると認識できる。

設問項目別の「回答割合」を見ると、上記I～IVの設問において回答が4.00以上となっている項目については、70%以上の学生が「大いにそう思う+そう思う」と回答している状況がうかがえた。

さらに、「授業規模別」の回答では、講座4課程の授業の76%が50人以下の授業、22%が51～100人規模の授業となっていることが特徴としてあげられよう。その上で授業規模別の単純比較をおこなうと、平均値では、II1とII2を除く全ての項目で50名以下の科目の方が51～100名の科目より評価が高かった。II1「聞きやすい話し方だった」は評価の逆

転がみられ、またⅡ2「各回の授業内容の量が適切だった」は評価差がみられなかった。これは51名以上クラス担当の教員が、クラス規模にあわせて講義設計をおこなっていることが推測される。なお101名以上の科目は1クラスであり評価対象から外れており、また151名以上の科目はなかった。

「学年別」の回答では、例えばⅣ4「この授業を受けて満足した」では、1年が4.13、2年が4.35、3年が4.50、4年が4.59という回答であったが、概ねこのように学年進行に従って評価が上がる傾向がみられる。ただし、Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」は学年進行に従って、4.17→4.31→4.41→4.37と、Ⅲ4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」は、同様に4.07→4.16→4.25→4.22と3年から4年にかけて評価が低下している。一方で、Ⅱ7「板書のしかたが適切だった」は、学年進行にしたがい4.04→4.10→4.25→4.43と変化している。これらは、学生の4年間の自学科学士課程および教職課程の学習や講座各課程の実習や体験、さらには正課外活動などを含めた大学生活全体がもたらす知的発達に伴う変化のプロセスであるとも推測できる。

「課程別」の回答を見ると、授業評価の対象科目選定の基準が課程によって異なること、対象科目50科目のうち、教職課程=23、学芸員課程=4、司書課程=8、社会教育主事課程=1、共通科目=14とばらつきがあり、また課程ごとの受講学生数にも差があるため、単純に比較検討はできない。全体的傾向として、授業評価対象科目が1科目であった社会教育主事課程を除き、教職課程、学芸員課程、司書課程それぞれに概ね4点台の評価が得られていることを見て取ることができる。

設問内容の「項目間相関」では、講座全体における各項目の相関をみると、例えばⅣ「総合評価」のうち、Ⅳ4「授業の満足度」とその他の設問項目との関連では、Ⅳ1「わかりやすい授業だった」やⅣ2「授業全体の目標が明確だった」は、Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」やⅡ4「各回の授業内容は明確だった」と高い相関がみられる。

また、Ⅳ4「授業の満足度」との関連では、Ⅰ「授業への取り組み方」のうち、Ⅰ2「この授業に積極的に参加した」、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、Ⅰ5「シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」との間に高い相関がみられる。さらにⅡ「授業の進め方」の全項目及びⅢ授業から得たもの（全項目）と相関がみられる。

一方で、Ⅳ4「授業の満足度」は、Ⅰ1「授業全体を通じての出席率」、Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」との相関は弱いことを見て取ることができる。

これらのことから、学生の授業満足度は、各授業担当者の周到な授業準備と適切な授業運営がもたらした結果であることがうかがい知ることができよう。ただし、授業外の学生の事前・事後学習については、今後の課題として残ることも明らかとなった。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が自らの授業に対する学生からの評価に理解を示しており、各項目における自己の評価との間に大きな懸隔はなかったことが読み取れた。

また、各教員自身が評価する点としては、出席率の高さ（90%以上）、積極的な参加型の授業形態、基本的な知識獲得、学問的興味、ディスカッションやコメントペーパーの効用が記されている。課題としては、授業時以外の学習時間の少なさが述べられている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

おしなべてグループワークやロールプレイを取り入れた学生参加型の授業、リアクションペーパーと教員によるリプライといった方法を取り入れた授業への評価は高い傾向がみられた。また、視聴覚教材を使用する講義にも高い評価が示されている。これは2017年度と類似した傾向が2018年度もみられたということでもある。

なお少数ではあるが、パワーポイントの提示方法や、配付資料の方法、遅刻者への対応の仕方など授業方法や授業環境について改善を求める意見もみられた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

学生から高い評価を得ているグループワーク、ロールプレイ、フィールドワークなどいわゆるアクティブ・ラーニングや授業教材や配布資料の創意工夫、例えばリアクションペーパーの活用、パワーポイント形式の資料提示、配付教材資料のオンライン授業支援システム Blackboard へのアップ等は、さらに積極的に展開しようとする所見がみられる。また、出欠遅刻の取り方や板書方法などについての学生の要望や受講生数と教室規模のアンバランスを含む授業環境の問題、映像資料のプリント化などに対しては、各教員が真摯に受け止め、改善できる点についてはそれらを今後の検討課題とする回答が多くみられた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

所見記入の教員はおしなべて評価点の低い板書や視聴覚教材の使用方法などの改善に向けた姿勢を示す所見が多い。さらに授業時以外の学習についての工夫を考えようとする教員も見受けられる。これらについては、各課程でのFDの実施および講座FD委員会でも議論していくことが望まれることであろう。

4. 今後の改善に向けて

講座の授業評価アンケート結果は、一部を除き概ね4.00以上の評価が得られている。ここで経年変化を追ってみるならば、IV「総合評価」の下位4項目を2016年度、2017年度と比較すると次のようになる。数字は、2016年度→2017年度→2018年度の順である。

IV1「わかりやすい授業だった」：4.23→4.30→4.38

IV2「授業全体の目標が明確だった」：4.20→4.26→4.34

IV3「学問的興味をかきたてられた」：4.00→4.04→4.15

IV4「この授業を受けて満足した」：4.15→4.19→4.30

このように「総合評価」の下位項目いずれもが、年度ごとに上昇しており、各教員の授業改善が継続的におこなわれていることがうかがえる結果となっている。このような授業改善は今後も継続していきたいことである。

加えて、「2. 集計データにみられる結果のまとめ」で触れたように、上級学年になるほど授業評価は向上し、また板書の仕方への適切度の認識も向上してくる。ここから学年差と学生の大学の授業に対する意識や学び方の変化についての関連を読み取ることはできない。一方で、この学年進行による変化は、高校までの学び方と大学での学び方の相違に直面してから大学での学び方に順応していく過程を示していると読み取ることもできよう。この点に

ついて、全学的な課題となるであろうが、大学の授業についての高大接続や導入教育などをより一層はかることが望まれる。そして学生自身が大学入学初期の頃より大学での学び方を習得していくことと教員の継続的な授業改善がセットとなった大学の（本学ならではの）授業改善の取り組みが実現するのではないだろうか。この点は、2016年度より導入された RIKKYO Learning style のファーストタームプログラム（導入期）における「学びの精神・学びの技法」の分析が俟たれるところである。

5. 2018 年度のまとめと今後の展望

2019 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 山田 康之

2018 年度の授業評価アンケートでは、本報告書 p.5 にあるように「学部等の必要性に応じた選定」により、対象となる科目を選定した。その結果、実施予定科目数は 1,084 科目となり、このうち 99.08%にあたる 1,074 科目で実施された。このような大規模なアンケートが滞りなく実施されたことについて、実施委員会として、実施に関わったすべての皆さまに感謝申し上げます。

アンケート実施率が非常に高いものとなっている一方、実施科目についての担当教員からの所見票提出率は 78.49% (843/1,074) に留まっている。本報告書 pp.3-4 にまとめられている通り、所見票作成には、アンケートに回答してくれた学生たちへのフィードバックの意味も込められている。本アンケートが学生諸君の貴重な時間を割いて実施しているものであることを踏まえ、教員各位には重ねてご協力をお願いしたい。

各学部等における科目選定方針は、本報告書 pp.10-11 の一覧にあるように様々である。このため、学部ごとの結果について比較することは容易ではない。詳細は p.20 からの各学部等総評をご参照頂きたい。

2018 年度も多く多くの学部等に共通して、学生の勉学に取り組む姿勢（「授業時間外での学習時間」、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」「授業をきっかけに発展的な勉強をした」）の改善が今後の課題として取りあげられている。これは 2004 年度に実施された本学における初回の授業評価アンケートから一貫して見られる傾向である。個々の授業における改善に向けた様々な取り組みについては、本報告書の学部等総評には現れてこない。ぜひ各教員が執筆した所見票をご覧頂き（所見票閲覧システム（要 V-Campus ID）<https://wwwj.rikkyo.ac.jp/kyomubu/etsuran/top.html>）、情報入手、活用して頂きたい。

本年度の所見票に見られた特徴として、2019 年度から実施している授業の 100 分化に言及しているものが挙げられる。授業の進度や内容についての意見（早すぎる、詰め込みすぎるなど）への対応や、学生と双方向にやり取りする機会の確保など、これまでは対応の難しかった内容について、授業時間のプラス 10 分の活用により改善することを期待した記述が多く見られた。100 分での授業実施を受け、2019 年度のアンケート結果や所見票にどのような影響が見られるか注視したい。

この他、学生からの意見としては、私語やそれに対する教員の対応に対する苦情が多くの学部等に共通して見られた。クラスサイズと静粛性には相関が見られることから、過度に大きなクラスサイズとなっている授業について、授業の進め方や教員の対応による改善だけではなく、適正な履修者数を保てるような様々なしくみを作っていくことが必要であろう。

2019年5月30日の教育改革推進会議で、2021年度からの授業評価アンケートのスマートフォンなどを用いたweb化が提案、承認された。既にアンケート項目の整理、実施方法などについての具体的な検討が始まっており、2020年度にはパイロット実施が計画されている。web化により、全授業科目を対象として授業評価アンケートを実施可能な体制を構築することができる。また、これまでの授業評価アンケートは授業時間を30分程度使って行われており、特に大規模教室では用紙の配布・回収にも相当の時間がかかり、本来の授業時間を削ってしまっていたものが、webによる実施では大幅に短縮され、授業運営に対する影響の軽減や、学生にとっても利便性が向上することが期待されている。この他、集計に時間を要さないことから、例えば授業期間中に適宜アンケートを行い、学生からの意見をモニターしながら授業を展開していくといった形を取ることも可能になる予定である。

今後も授業評価アンケートには、本学の教育の質の維持・向上のためのツールとしての役割が期待される。授業評価アンケートの実施形態が大きく変わるこの機会に、授業評価アンケートを実施することの意義・目的の共有のために、授業評価アンケートに対する各教員の考え方を聞くアンケートを実施するなどの取り組みも有用かもしれない。

6. 2018 年度集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 71,066 名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文学部	9,620	6,648	69.11
経済学部	4,279	3,304	77.21
理学部	6,737	4,359	64.70
社会学部	17,851	9,715	54.42
法学部	1,911	648	33.91
経営学部	14,427	7,489	51.91
異文化コミュニケーション学部	609	456	74.88
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	219	181	82.65
観光学部	5,936	4,079	68.72
コミュニティ福祉学部	3,281	2,428	74.00
現代心理学部	3,649	2,687	73.64
全学共通カリキュラム運営センター	41,131	27,351	66.50
学校・社会教育講座	2,131	1,721	80.76
合計	111,781	71,066	63.58

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	その他	合計
文学部	2,716	1,886	1,336	584	126	6,648
経済学部	3,018	142	40	15	89	3,304
理学部	1,573	1,531	976	182	97	4,359
社会学部	2,963	2,933	2,626	933	260	9,715
法学部	1	238	241	156	12	648
経営学部	1,954	2,128	2,233	845	329	7,489
異文化コミュニケーション学部	294	82	42	13	25	456
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	92	62	8	0	19	181
観光学部	617	1,387	1,524	500	51	4,079
コミュニティ福祉学部	642	1,058	547	140	41	2,428
現代心理学部	632	1,130	634	227	64	2,687
全学共通カリキュラム運営センター	10,893	7,960	5,618	2,098	782	27,351
学校・社会教育講座	672	634	333	27	55	1,721
合計	26,067	21,171	16,158	5,720	1,950	71,066

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 「その他」は、本学学部生以外（本学大学院学生・特別外国人学生・特別聴講学生・科目等履修生等）と学年にマークがなかった不明者

注4) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 学部等別平均値

表3 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	6,628	92.38	13.19
I 2 この授業に積極的に参加した	6,631	4.06	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,625	3.56	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,623	3.48	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,583	3.77	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	6,614	1.11	1.04
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,626	4.10	0.97
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,625	4.09	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,621	4.10	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,620	4.14	0.91
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,619	4.07	1.02
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,555	4.10	0.96
II 7 板書のしかたが適切だった	3,463	3.91	1.01
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4,679	4.24	0.90
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,444	4.34	0.82
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,614	4.05	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,612	4.01	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,610	3.77	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,604	3.90	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,612	4.05	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,614	4.08	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,612	3.98	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	6,609	4.04	0.99
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,312	4.21	1.03
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,311	4.15	1.04

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表4 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率*1	3,292	94.05	13.96
I 2 この授業に積極的に参加した	3,295	4.23	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,295	3.76	1.11
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,291	3.50	1.21
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3,284	3.54	1.17
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	3,284	1.28	1.15
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	3,294	4.05	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,292	4.04	1.05
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,294	4.06	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,293	4.09	1.02
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,285	3.89	1.14
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,272	4.02	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	2,284	3.88	1.10
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,490	4.00	1.04
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,211	4.21	0.95
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,291	3.79	1.05
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,291	3.95	1.00
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,289	3.72	1.09
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,284	3.79	1.04
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	3,291	3.98	1.11
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,289	4.04	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,290	3.79	1.14
IV 4 この授業を受けて満足した	3,289	3.88	1.13
V 学部等による設問			
V 1 （基礎ゼミナール1）経済文献を読む力がついた	585	4.10	0.96
V 2 （基礎ゼミナール1）レジュメやレポート作成の力がついた	584	4.28	0.88
V 3 （情報処理入門1）表計算ソフト（Excel）の応用力が身についた	572	4.35	0.84
V 4 （情報処理入門1）Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	576	4.20	0.96
V 5 （情報処理入門1）WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	577	4.26	0.91

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表5 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	4,343	93.29	14.57
I 2 この授業に積極的に参加した	4,340	4.14	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,338	3.62	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,332	3.51	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,330	3.59	1.09
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	4,331	1.39	1.08
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,334	3.96	1.07
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,332	3.92	1.06
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,331	3.97	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,331	4.00	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,325	4.07	1.01
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,312	4.01	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	3,632	3.87	1.11
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	3,362	4.09	1.01
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,267	4.21	0.91
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,327	3.93	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,329	3.97	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,328	3.82	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,318	3.72	1.04
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,329	3.90	1.09
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,326	3.98	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,326	3.84	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	4,327	3.89	1.07
V 学部等による設問			
V 1 シラバスに沿って授業が行われた	4,254	4.04	0.95
V 2 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,237	4.10	0.93
V 3 (1年次春学期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	819	3.64	1.15
V 4 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,714	3.86	1.11

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表6 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	9,690	91.79	13.73
I 2 この授業に積極的に参加した	9,684	3.96	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,682	3.41	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,668	3.26	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,621	3.68	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	9,649	0.88	0.96
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,676	4.03	1.02
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,669	4.06	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,666	4.06	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,661	4.09	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,657	4.00	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,577	3.98	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	4,834	3.74	1.03
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,507	4.16	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,472	4.28	0.83
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,660	4.02	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,661	3.96	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,655	3.59	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,647	3.94	0.93
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,655	4.03	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,655	4.05	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,655	3.92	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	9,652	3.99	0.98

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表7 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	648	80.25	23.38
I 2 この授業に積極的に参加した	648	3.51	1.16
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	646	2.99	1.08
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	645	2.99	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	644	3.62	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	646	1.03	0.93
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	646	4.11	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	645	4.11	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	646	4.12	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	644	4.14	0.96
II 5 十分な静粛性が保たれた	644	4.48	0.74
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	641	4.08	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	530	3.56	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	289	4.00	1.07
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	624	4.37	0.79
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	646	3.64	1.04
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	646	3.90	0.97
III 3 自分で調べ、考える姿勢	646	3.39	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	645	3.72	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	646	3.98	1.09
IV 2 授業全体の目標が明確だった	645	4.06	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	646	3.77	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	646	3.89	1.06

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表8 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	7,468	90.32	16.29
I 2 この授業に積極的に参加した	7,465	3.95	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,458	3.62	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,455	3.54	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,441	3.70	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	7,444	1.18	1.10
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,457	4.07	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,456	4.12	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,459	4.09	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,443	4.10	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,441	4.04	0.98
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,396	3.98	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	4,109	3.86	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,930	4.10	0.97
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,324	4.27	0.84
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,449	3.96	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,448	4.05	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,447	3.79	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,429	3.95	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,441	4.02	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,439	4.06	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,444	3.94	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	7,438	4.01	0.99

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表9 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	454	95.55	9.61
I 2 この授業に積極的に参加した	453	4.13	0.87
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	453	3.61	0.97
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	453	3.62	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	447	4.03	0.92
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	453	1.23	0.96
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	454	4.43	0.82
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	453	4.28	0.82
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	453	4.36	0.80
II 4 各回の授業内容は明確だった	450	4.38	0.77
II 5 十分な静粛性が保たれた	453	4.14	0.92
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	451	4.27	0.84
II 7 板書のしかたが適切だった	260	4.07	1.00
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	445	4.50	0.70
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	444	4.65	0.60
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	453	4.35	0.75
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	452	4.26	0.80
III 3 自分で調べ、考える姿勢	453	3.89	0.94
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	453	4.10	0.87
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	454	4.17	0.95
IV 2 授業全体の目標が明確だった	452	4.35	0.75
IV 3 学問的興味をかきたてられた	452	4.20	0.86
IV 4 この授業を受けて満足した	451	4.23	0.85

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表10 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率*1	181	94.03	10.74
I 2 この授業に積極的に参加した	181	4.07	0.77
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	180	3.86	0.94
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	180	4.03	0.95
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	180	3.99	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	180	1.61	1.11
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	181	4.29	0.87
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	181	4.20	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	181	4.22	0.90
II 4 各回の授業内容は明確だった	181	4.29	0.83
II 5 十分な静粛性が保たれた	180	4.20	0.83
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	177	4.18	0.88
II 7 板書のしかたが適切だった	143	4.17	0.99
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	178	4.46	0.78
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	178	4.62	0.66
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	181	4.22	0.92
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	181	4.21	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	181	4.08	0.91
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	180	4.28	0.87
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	181	4.13	0.89
IV 2 授業全体の目標が明確だった	179	4.18	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	180	4.23	0.94
IV 4 この授業を受けて満足した	181	4.19	0.96

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 1 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	4,074	92.55	12.56
I 2 この授業に積極的に参加した	4,071	4.08	0.87
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,073	3.54	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,070	3.44	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,056	3.88	0.93
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	4,071	0.92	0.97
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,071	4.18	0.94
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,073	4.17	0.89
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,072	4.20	0.89
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,071	4.23	0.87
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,068	4.20	0.95
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,035	4.08	0.98
II 7 板書のしかたが適切だった	1,529	3.79	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	3,823	4.31	0.86
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,018	4.44	0.76
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,073	4.18	0.85
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,071	4.15	0.85
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,070	3.77	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,066	4.09	0.88
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,074	4.16	0.93
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,073	4.18	0.90
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,073	4.06	0.96
IV 4 この授業を受けて満足した	4,070	4.15	0.94

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表12 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	2,423	92.33	13.36
I 2 この授業に積極的に参加した	2,423	4.10	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,421	3.48	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,410	3.29	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,412	3.72	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	2,417	0.83	0.94
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,423	4.04	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,423	4.04	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,422	4.14	0.91
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,416	4.16	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,420	4.23	0.92
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,393	3.99	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	1,336	3.72	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,299	4.18	0.98
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,376	4.39	0.78
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,421	4.04	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,420	4.06	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,421	3.63	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,412	3.96	0.93
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,422	4.05	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,421	4.10	0.91
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,421	3.90	1.04
IV 4 この授業を受けて満足した	2,422	4.04	0.97

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 3 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	2,684	91.80	12.97
I 2 この授業に積極的に参加した	2,682	3.98	0.93
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,682	3.40	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,675	3.25	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,671	3.85	0.95
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	2,676	0.71	0.90
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,685	4.16	0.95
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,685	4.19	0.87
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,683	4.17	0.91
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,684	4.22	0.87
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,682	4.17	0.96
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,654	4.13	0.95
II 7 板書のしかたが適切だった	1,316	3.85	0.98
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,284	4.35	0.83
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,635	4.41	0.77
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,683	4.18	0.86
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,684	4.08	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,683	3.54	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,680	3.96	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,685	4.16	0.96
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,684	4.18	0.89
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,685	4.10	0.96
IV 4 この授業を受けて満足した	2,684	4.16	0.93
V 学部等による設問			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	2,627	4.28	0.86
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	2,622	4.31	0.87
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	2,614	4.13	0.90

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表14 全学共通カリキュラム運営センター

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	27,276	92.40	12.86
I 2 この授業に積極的に参加した	27,275	4.06	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	27,254	3.46	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	27,223	3.31	1.14
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	27,105	3.78	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	27,215	0.86	1.01
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	27,276	4.18	0.94
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	27,264	4.17	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	27,250	4.16	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	27,220	4.20	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	27,216	4.16	0.96
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	26,972	4.08	0.98
II 7 板書のしかたが適切だった	13,736	3.83	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	24,482	4.32	0.88
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	26,730	4.42	0.78
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	27,230	4.12	0.92
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	27,230	4.00	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	27,223	3.62	1.07
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	27,181	3.96	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	27,214	4.14	0.96
IV 2 授業全体の目標が明確だった	27,214	4.15	0.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	27,227	4.02	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	27,219	4.10	0.98
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	25,248	4.19	1.02
V 2 この授業の受講者数は適切だった	25,228	4.21	0.93
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	25,122	4.25	0.91
V 4 【学びの精神のみ対象】この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた	7,183	4.15	0.96
V 5 【学びの精神のみ対象】この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた	7,164	3.89	1.04
V 6 この授業の登録方法（次の中から選んでマークしてください）	—	—	—
⑤1次抽選登録 ④2次抽選登録 ③科目コード登録 ②その他 ①覚えていない			

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表15 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	1,716	94.91	10.01
I 2 この授業に積極的に参加した	1,712	4.20	0.85
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,713	3.68	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,710	3.57	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,701	3.87	0.96
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	1,710	0.91	0.93
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,711	4.43	0.79
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,712	4.34	0.82
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,710	4.34	0.83
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,710	4.39	0.79
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,713	4.49	0.76
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,701	4.34	0.83
II 7 板書のしかたが適切だった	1,282	4.11	0.92
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,522	4.40	0.77
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,675	4.56	0.67
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,713	4.27	0.81
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,712	4.25	0.80
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,712	3.86	0.98
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,708	4.15	0.87
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,712	4.38	0.82
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,711	4.34	0.82
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,711	4.15	0.97
IV 4 この授業を受けて満足した	1,711	4.30	0.86

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

大学教育開発・支援センター（2019年9月現在）

センター長 栗田 和好（理学部）

教学IR部会

部会長 一ノ瀬 大輔（経済学部）
山田 康之（教務部副部長、理学部）
水上 徹男（社会学部長）
木村 忠正（社会学部）
大澤 敏彦（教務部 教務事務センター）

事務局 総長室 教学改革課

2018年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長 山田 康之（教務部副部長、理学部）
澤村 亜生津（総長室 教学改革課）
佐藤 百恵（総長室 教学改革課）
伊藤 明（教務部 教務事務センター）
新井 努（教務部 教務事務センター）

2019年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長 山田 康之（教務部副部長、理学部）
澤村 亜生津（総長室 教学改革課）
佐藤 百恵（総長室 教学改革課 5月まで）
吉池 栄（総長室 教学改革課 6月から）
伊藤 明（教務部 教務事務センター）
住吉 美和子（教務部 教務事務センター）

2018年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2019年9月発行

編集 立教大学 2019年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>

e-mail cdshe@rikkyo.ac.jp

